



百藝記念同人誌

松原寛研究会

熱情

「熱情」発行にあたって

今年、日本大学藝術学部は百周年を迎えました。私たちはこの記念すべき時に日藝生であること、本当に誇りに思っています。

「熱情」編集部は、文芸学科の二年生で構成されています。新型コロナウイルス感染症により、入学式もなく始まった大学生活。始めは慣れないオンライン授業に四苦八苦、とても不安でした。今もほとんどの授業がオンラインです。

しかし、日藝に来て、藝術を志す仲間と出会い、楽しく過ごしております。

このような状況下で、尚且つ百周年の今日、私たち学生に何か出来ることはないのかと考えました。学生たちでも松原寛先生の雑誌を創れたら面白いのではないか、と思いついたのです。

個性豊かな仲間たちを集めて、このような雑誌を発行することが出来ました。

松原寛先生のことをみんなに知ってほしいので、先生のことを学んで自分たちなりに創作をしました。私たちなりに化けることが出来たと思います！

是非、読んでみてください。

代表 山根麻耶

「熱情」を生んだ一言

「松原寛の同人誌を作ったら面白くない？」私の一言でこの企画は始まった。そのようなノリから頓挫も自然解体もせず、ここまで来られたのは奇跡と言って良いだろう。

それは集った仲間たちが皆、瑞々しい熱情に溢れ、寛先生の目指す熱情を追求していたからに他ならない。そのような日々を過ごす中で、協力を賜ることとなった先生方をはじめ、ここまで応援下さった皆さまに対しこの場を借りて感謝申し上げたい。

私は今でも覚えている。原稿に向き合った時の高揚感を。もしかしたら、想像以上に良いものが出来るのではないか。寛先生の仰った猿の物真似ではない、思想による熱情と生命感に富んだ作品を生み出したのではないかという実感があつた。

実際に仲間たちの作品も自分の思想を「松原寛」という男の人生で表現している。その感性は鋭く、そして深い。そんな作品たちを集めたこの雑誌はまさに寛のスピリットを凝縮したものとなっている。寛自身、寛の妻、寛を崇拜する者……その様々な視点から綴られる寛ワールドをどうか楽しんでいただきたい。そして松原寛という男について少しでも思いを巡らせて下されば幸いです。

## 目次

評論	熱情は寛が得た足である	本間 日菜乃	……7
小説	拝啓、私を殺した愛しい貴方	北川 まなみ	……15
小説	虫のカン	クヂラ	……25
小説	芸術なんて、	くりすていのアヤノ	……41
小説	等身大	金子 汐音	……47

詩 おくりび 田口 愛理 …… 57

戯曲 寛容 山根 麻耶 …… 63

戯曲 長崎—東京寛、三十日 本間 日菜乃 …… 85

エッセイ 拜啓、これから学ぶ君へ 馬場 楓 …… 97

エッセイ いま、「熱情」と向き合う。 山根 麻耶 …… 103

ソコロワ山下先生と「熱情」編集部による座談会 …… 112



熱情とは寛が得た足である

本間 日菜乃

令和の日芸生の諸君。こんにちは。私はカンカンこと、松原寛といいます。あ、やめて通報しないで、決してアヤシイ者じゃないから。え？ 警備員に言いつける？ それもやめて、残念なことに身分証を持っていないのだよ。そうか、皆さんは私のことを知らないのか。悲しいなあ、あんなに頑張ったのに。銅像もあんなヘンピなところにあつたら誰にも気づいて貰えないじゃないか。全く、この酷い待遇を木村先生に何とかして貰わなくては。まあ彼も不遇仲間と言ったらそうなのだが。

改めて私の名は松原寛。松原寛といえは？……じゃ、じゃあ少しでも聞き覚えのある人は？……そうだよ、この私がここ、日本大学芸術学部の創始者だよ。正確に言えば当時は日本大学美術科だったがね。今日は名前だけでも覚えて帰って貰いたい。

さて、私がここに来た理由はひとつ、諸君のだらけた姿勢を改めるため、ふたつ、江古田カレーを食べるためだ。……カレーなんてそつちでも食えるだろ？ いやいや、天界のカレーは獄激辛か閻魔王激辛しかないのだよ。全く、ここにきてまで地獄に落とす気かね。まあ、何というか、あのなんとも言えないチープな味が恋しくなっちゃったというわけだ。

いかんいかん、そんなことは良いんだった。それよりもまず、諸君に喝を入れにきたのだよ。「あまりにも熱情を忘れてしまつてやいないか？」と。え？ 熱情とはなんだつて？ ……違う違う、松岡修造とかの熱血！ つていうのじゃなくて、もっとこう……内に秘め

た感じのものだ。

私は文章を書くにも絵を描くにも、とにかく芸術活動全ての根源は「熱情」にあると考えている。かの本には日芸魂なんて書いてあるけれど、そんな大仰なことではない。熱情さえ持つていけば芸術活動のみならず、全ての分野において大成することが出来ると言えよう。……昔話は嫌われるかもしれないが、かつて私も熱情を持つて行動し、その結果日芸という学舎を守ることが出来た。まあ実際に頑張つて動いてくれたのは私ではないのだが。「芸術は理系に属する」なんて世界中回つても聞いたことのないトンデモ理論を押し通すべく私たちは頑張つた。しかも相手は天下の文部省。傲慢で熱情の欠けりもない権力の塊みたいな連中しかいない。そんなやつらと戦うのだから、とにかくしぶとくやるしかない。その粘り強さを生み出したのは、私の心に眠る熱情だったのだ。

ところで日本大学に来たというのにアレだが、私はもともとキリストの教えに傾倒していた。高校時代、ミッシヨンスクールであったのが一番の理由だろう。皆が退屈だという日曜礼拝も私にとつては発見の宝庫だった。牧師の説教なんていうのはまさに哲学に通じており、その素晴らしさに心酔した私は本気で宣教師を目指していた。思えばあれから、心に熱情を宿し始めたのかもしれない。少なくとも、対象は違えど私の求める答えをがむしやらに追い求めていくことが出来たのは、あの学生生活があつたからであろう。……と、さつき皆に「熱情を忘れてやしないか？」と問うたが、まさにそういうことだ。令和の日

芸生、つまり諸君には本気の熱情が足りない。私がひたすら熱情をあげて、プロテスタントや日蓮宗、さらには哲学まで追い求め、ついには天理教の教えに帰依したように、君たちも探究心や熱情を持って、人生をかけて芸術を学びとつてほしいのだ。

君たちは人に流されてはいけない。自分がこうだと思つたら突き通さなければならぬ。少しでも違ふと思つたらそれには抵抗し、事象を反芻しながら噛み砕くことで己の哲学をつくりあげる。それでこそ芸術であり、眞の生きる美学と言える。だから友人と仲良しこよし何かをやるのもいいが、自分の力でひとつ、大きなことを成し遂げてみよ。「これだけは自分でやり遂げた」と思える何かをやってみよ。文芸なら取材を徹底した長編小説を一編書いてみるだとか、絵や音楽ならば、ただ惰性で書くのではなく世界観を固めて何を質問されても答えられるように作り込むだとか、演劇だつて脚本からその背景を読み取り、その役にまつわるものは全て調べ、「役者ではなく自分自身が話している」といった境地まで突き詰めてみる。やれることは沢山ある。決してお説教をしたいわけではないが、昨今の日芸生はなんとなくだらけているような、自分自身に対する危機感が全く感じられないのだ。もつとこの作品で生きるか死ぬかを決められるような、そんな覚悟が欲しい。

さて、こんなに話していても、まだまだ伝えたいことは沢山ある。だが、諸君がまず始めなくてはならないことは私の研究であろう。この棟の「階」、図書館に行けば私にまつわる資料や、著書が沢山ある。面倒かもしれないが、ひとつそれを借りて読んでみるとい

い。私の思考が如実にあらわれているはずだ。それか先生達に聞いてみるのもいいだろう。特に文芸学科の先生たちは詳しいには詳しいはずだ。殊に彼らの私について書く、ということにかこつけて自分たちの研究を熱く語っている点は見逃せない。別に怒っているという事ではなくて、チャンスにできるものならしてしまえという彼らの狡猾さと野望が見え隠れしている。とてもいい、非常にいい。私もどちらかと言えばそんなタイプの人間だったから何も言えないのもあるが。だからもし、私を題材とした雑誌があるとして、真面目に私について書いている者がいたとしたら、それは馬鹿者、大馬鹿者だ。こういうときこそチャンスだと気づけないといけない。他人について書くなんて時間の無駄だと思わんかね？ どうせその本心なんて誰も分らないというのに。だったらその時間で自分のことを書き連ねるほうがよっぽど有意義だとどうして思わないのかね？

私は今まで再三、熱情を持つて芸術に取り組めと言ってきたが、それが決して何かに役立つというわけではない。むしろこれからの自分の人生だけを考えた時、マイナスになつてしまうこともあるだろう。しかし、そんな目先の人生だけに囚われて、芸術を執念深く突き詰めないのは百年単位で見た時、大きな損失となりえる。先ほども言った通り、私たちが学部存続に向けて頑張った数ヶ月は私たちの人生の中では無駄な時間の浪費だったであらうが、それが何十年も経った今日までの多彩な文化人が生まれる礎となったのならば、その利益は莫大なものだ。だからこそ一生をかけて何かを追求することは、後世に引き継

ぐ大きな遺産となり得るのだ。

では、どうしたら熱情を持ち続けることが出来るのか。それは個性を忘れないことに尽きる。「何を今さら」と思われるかもしれないが、これは大事なことだ。大半の人は「個性がある」なんて言われても、その個性が何であるのかを分かっていない。なんとなく嬉しくなってはみるけれど、本当に自分で自分の個性を知っているわけではない。実はその人の個性をよく知るのとは自分ではない、周囲の人々なのだ。……おっと、それでは先ほどの他人のことを語るのとは無駄であるという論からズレてしまうと思われたかな？ 言い方を換えよう。無意味だというのは他人の個性を他人のまま描くことだ。例を示すと「この人はカレーのルーとライスを必ず別にして食べることから、几帳面さが伺える」なんてのは誰にだって書けることだ。そうではなくて、それを自分なりに捉え直し「カレーとルーを別にして食べてしまう彼の姿勢は、ピザを箸で食べてしまうのと似ている。国外由来のものを、旧来の日本の形で受容する。そんなパラドックスが面白い。ところでパラドックスと言えば」という風に現代でいう隙自語に持っていく。このように他人の個性を自分の視点で書くというのが重要だ。どうやら皆の中では隙自語というあまりいい顔をされないらしいが、これこそ真つ当な芸術活動だと言えるだろう。

と、脱線してしまった。かかるところ個性とは、生命やその精神の中心にあるもので、その人をその人たらしめるものだ。つまりその個性をみることで、その人の生命を理解す

るということに繋がる。もちろん、それらの個性は自分自身で掘っていかねければならないものだが、それを発掘するのは周りの人々だ。自分を徹底的に突き詰めて、それを周りに発見してもらう。先ほど言った馴れ合いではない、本当の創作活動の原点はここにあると思うのだ。そしてその原点が熱情の原点であり、人生いや、人類にとつての普遍のテーマとなる。

人生とはすなわち彫刻のようなものだと考える。一片の木を、石を人生をかけて彫って彫って彫りぬいていく。そしてその人生が終わる時、皆さんはどのようなオブジェが出来上がっているだろうか。少しヘンでもそれもまた味。私の像のように一発で「人間だ!」と思われるようなものではまだまだ足りないかもしれない。自分の個性を掘って掘って、自分だけの像を彫って彫って彫り抜く。これを達成するにはやはり「熱情」が必要であろう。命をかけて彫った像はいつか、必ず誰かの力になり得る。皆さんにとつての私のように、仮に忘れられていたとしても、他の人生を作り上げる手伝いができるなんて、それより嬉しいことはない。

「熱情は寛が得た足である」。ソクラテス君には悪いが、語呂がいいので使わせてもらった。私の熱情がなければ、日芸も、先生もそして皆さんもここにはいないだろう。もちろん江古田カレーだって。そう考えると「熱情」とはとても恐ろしいものだとは思わないかね?だが、同時にとても面白い。恐ろしくもあり、恐ろしく楽しくもある。こんな学舎に

来た諸君なら、その意味がよくわかるだろう。どうか諸君にはそのスリルと興奮に満ちた人生を送ってほしい。スパイスなんて効き過ぎるぐらいが丁度いい。甘口ではなく、獄激辛レベルの人生を歩んでみても面白い。私は自分の人生を振り返り、なかなかスパイスの効いた人生だったように思う。ただ、今を生きる日芸生にはもつと、様々なスパイスを加えて欲しい。もはや味が分からなくなってしまうぐらいにね。………と失礼、腹の虫が鳴り止まないようだ。ここで一旦お暇させて貰おう。もしいつか、江古田カレーに獄激辛が増えていたとしたら、きつとそれはカンカンのリクエストだろう。あつ、そうそう、諸君はきつと明日にでも私の存在を忘れてしまっているだろうが、とりあえず今日のところは顔を見せて帰って欲しい。だって我が子の顔を見たくない親などいないだろう？

拝啓、私を殺した愛しい貴方

北川 まなみ

寛さんは、尊敬できる人でした。一年しか共に過ごさなかったけれど、私が寛さんを愛していたことは、紛れもない事実だったのです。

「寛さん、寛さんに」

もう、とうに言葉は出ませんでした。息苦しくて、何かを発しようとするたび目の前が白ばんで、どんどん空気が薄くなっていくのを感じました。今日が、いや、今が、私の最期のだろう。そう覚悟していました。

寛さんに会いたい。その一心で、けれど言葉が出てこなくて、寛さん、寛さんと何度もつぶやきました。それなのに、そのたびに寛さんが遠くなっていく気がしたのです。もうこのまま会えることなく私は死ぬのだと分かっていました。

私が寛さんと結婚したのは、二十五の時でした。九つ上の寛さんは、当時の私にはとても大人に思えて、良家に生まれ芸術を学ばされていた私から見ると、商家に生まれながらも自ら学び、芸術教育に熱い寛さんはとても不思議な人でした。私が嫌に思っていた芸術や教育を、この人はどうしてこんなに熱心に追い求めているのだろうと、あまり理解は出来なかつたけれど、芸術を語る寛さんの目は、生き生きしていました。私はそれをただ頷きながら聞いているのが好きでした。誰だつて分かるはずです。好きな人が、好きなことをただ語っているその目は、本当にきれいなのです。私が理解できないことを、理解するまで説明しようとはせず、自分の話したいことだけをずっと話している寛さんを、私は面

白く思っていました。寛さんの輝くその瞳に、私が映っていないくとも、私はそれでよかったです。寛さんの色んな表情を引き出せるのは、芸術しかありません。私と一緒にいるだけでは、寛さんに何の裏りもないからです。

寛さんは、別に私を愛してなどいかなかったと思います。いえ、はつきりと分かります。愛してなどいませんでした。寛さんから愛を感じたことが、本当に一度たりともなかったのです。仕方のないことだとは思いますが、私たちはお見合い結婚で、恋愛結婚とは違います。お互いがお互いを愛し、一緒になりたくてたまらなかった、そういうわけではありません。結婚が当たり前で、その相手に物静かで家柄の良い私がちょうどよかっただけです。だから、天秤が傾いていることなど百も承知だったのです。

子供が生まれたら変わると思いました。子供を愛しく思うほど、その子供が生まれ出た私のことを愛しく思うはずで。そうすれば私だって愛してもらえらると思えました。そう思えば、本能的な子作りでしかない行為だって耐えることが出来ました。私のことを捉えていない瞳も、いつか愛に変わるはずだと。そう信じていたから耐えられたのです。

けれど、そんなにうまくはいきませんでした。息子が生まれると、寛さんは今まで以上に帰ってこなくなりました。仕事が忙しいことなど分かっています。その頃は芸術科が来て間もなく、寛さんはその拡大に尽力していました。結婚してから、我が家にも仕事仲間が何度も来ました。それが息子の誕生により、場所を変えただけです。息子がすぐに泣

くから、仕事どころではなかったのだと思います。薄情だとは思いません。寛さんの芸術教育に向き合う真つ直ぐな瞳が好きだったから、その輝く瞳を維持していてくれるのなら、家にいないことなど気にもなりませんでした。

ただ、私は、帰つてすぐ寢床につく寛さんが嫌でした。息子にも私にも目をくれず、「おかえりなさい」と声をかけると、「ああ」とだけ言つて眠りについでしまうのです。息子が夜泣きしても、ぴくりともせず規則的な寝息を立てて寝ていました。泣き止まない息子を胸に抱き、その呼吸を聞いている時が一番の苦痛でした。息子を愛しているのならば、私を少しでも思つてくれるならば、この泣き声で、飛び起きてくれるのではないのですか。仕事に出かけ、帰つて寝ているだけの寛さんは、私の苦勞など一つも知らないのです。もちろん、私を勞つてくれるわけありません。ただ一言言つてくれたなら良かったのです。「いつもありがとう」と。その言葉もなく、寛さんの気持ちを感じられないまま、私はいつしか、息子を育てるだけのサイボーグになり果てていました。

そんな日々を過ごすうちに、私は息子を憎く感じるようになりました。この子を産めば、寛さんは私のことを愛してくれるはずだと思つていたのに、ちつともそんなことはありません。むしろどんどん遠ざかつていくようです。ならば、どうして私はこの子を産んだのでしょうか。毎晩毎晩泣き声に起こされ、日中だつて少し目を離してしまえばふらつとどこかへ行つてしまうのです。気が休まる暇ありません。苦しくて自分の髪を掴むと、はら

はらと何本も毛が抜けていってしまいます。私がどれほど努力しても、息子はまだ言葉も通じないただの動物でしかないのです。私の苦勞は、寛さんも、息子も、誰も知りません。息子を愛しくなんて思えませんでした。

私は怖かったです。自分の血を分けた最愛の息子であるはずなのに、寛さんに振り向いてもらうための道具としてしか息子を見ていませんでした。息子をもつてしても寛さんに愛されないと気付いた途端、憎くて、可愛げのない猿としか息子を認識できなくなつた、その事実気付いた時、私はなんてひどい母親なのだろうと苦しみに泣きました。小さく大切な命だから胸に抱いているのに、寛さんへのもどかしさで握りつぶしたくなる衝動に駆られるのです。自分の持っていた異常なまでの寛さんへの愛と、命を使ってまで気を引こうとする残虐性を、自分の中に認めたくありませんでした。目を合わせたくなかつた自分と目が合った時、苦しくて、気持ち悪くて、抑えようのない吐き気がしました。深夜に息子を抱いて咽び泣く私の嗚咽でも、寛さんはぴくりともしませんでした。

これ以上ここにはいはいけない。この人に執着してはいけない。私の女としての本能が、そう警笛を鳴らしていました。耳を劈くようなその音に耐え切れなくなり、私は寛さんが家を出ていったすぐ後に、息子を置いて家を飛び出しました。息子を連れていこうとも思いました。けれど、私が愛してもらえなかつた分、血を分けた息子が寛さんに愛してもらえれば、せめてもの救いになると思つたのです。だから、置いて出ました。息子の

泣き声が、背中にズン、とのしかかるようでした。脳内に響く爆音の警笛、降りかかる息子の泣き声。頭がおかしくなりそうでした。それでも、自分を守るために私は家を出てしまったのです。

そのことを、後悔したりなんてしませんでした。あの時家を出なければ、私はいつか息子を殺してしまっていたことでしょう。寛さんのことも、手にかけていたかもしれない。家を出ただけで、私の心の安寧は保たれたのです。寛さんに会いたい、と涙を流す夜もありました。息子の泣き声を恋しく思う夜もありました。けれども、あの家にいた頃より、私はずっとずっと安穩に暮らしていたのです。

離れて住んでしばらく経つと、意外にも寛さんのことで思い悩む時間は減っていききました。隣にいるのに愛されない、それが苦しかっただけで、離れていれば愛されないことについて、もどかしく思うことなんてありませんでした。殺したいほど息子を憎く思っていたことは、実際には大したことのない悩みだったのです。

そうして精神は安定していききましたが、私は寛さんと別れてほどなくして、病に侵されました。行き場のなかった私は、友人の家に転がり込み、その女中に看病してもらいながら、なんとか毎日を過ごしていました。することがないと、あまりにも時間が長く感じます。気付けば、私は寛さんの過去の著書を手に取り、読んでみたりしていました。私の好きだった芸術教育に熱心な寛さんの瞳は、思っていたよりも濃く脳裏に焼き付いていま

した。一文字一文字を目で追うたび、その瞳が迫ってくるようでした。

その後も、寛さんは変わらず芸術教育に熱心に取り組んでいたようです。私が家を出たのちに自伝的な本を出し、その中に「別れし妻に与ふ」というタイトルを見つけました。読みたい衝動に駆られましたが、私の病状はあまり良くなく、文字を読む気力さえ起きません。女中に聞くと、寛さんは私の出ていった理由を、経済的事情だと捉えていたようです。確かに私大の給与は僅かなものでした。けれども、そんなことどうだってよかったです。愛してさえもらえれば、それだけでよかったです。お金なんかじゃありません。たとえ欲しいものがすべて手に入るような大金持ちでも、私は家を出ていたでしょう。寛さんの気持ち、愛が私に向かない限り、警笛は鳴りやまなかったはず。これだから寛さんはダメなのです。ダメで、愛おしいのです。

私は気付いてしまいました。離れて暮らしたところで、私の寛さんに対する気持ちは変わらなかつたということに。ずっとずっと、愛しくてたまりません。胸が苦しいのは、病気のせいだと思っていました。けれども、苦しいときはいつも、寛さんの瞳が脳裏に浮かんでいたのです。全身が痺れるように、心臓から電気が駆け巡ります。痛くて、気持ちのいい痺れに、やっと気付かされたのです。一度愛した人を、忘れられるはずありません。

自分の死期を悟ってから、私は何度も寛さんの名を呼びました。最後に一度、どうしても会いたかつたのです。私が出ていって、家庭で私が担っていた役割を身をもって知った

ことでしよう。けれども、私への愛情は知覚したのでしようか。それとも、そもそも抱いてなんかいなかったのでしょうか。最後に、問い詰めてやりたかったのです。あなたは、私を一度でも愛してくれたことがありましたか、と。

私は寛さんに会えずして逝きました。それでよかったですと思っています。私を愛していたか、そう問うたら、寛さんはきつと黙りこくってしまっただしよから。最期にそんな寛さんを見たことはありませんでした。意識を手放すその瞬間まで、脳裏に浮かべる寛さんの瞳は、芸術を語って煌めいていました。星空のようでした。

私が死んで、寛さんは私の火葬や野辺送りをしてくれました。その表情は険しく、とても愛した妻の死を悲しむ顔には見えませんでした。きつと、ただ申し訳なさを嘔み潰そうとしているだけです。でも、それでも良かったのです。寛さんが私の最期を担ってくれているだけで、この世への未練は断ち切れそうでした。

寛さんと出会わなければ、きつと私がこんな若くに死ぬことなんてなかったでしょう。お見合いの相手が寛さんでなければ、もつと穏やかに生きていたはずです。私だって、知りませんでした、自分の狂気ともいえる愛憎なんて、知りたくもありませんでした。けれども運命には抗えないのです。私は何度生まれなおしても、寛さんに出会って、寛さんの愛のなさに殺されていた。そう思います。愛されないことこそが、私の宿命だったのかも知れません。

拝啓、私を殺した愛しい貴方

寛さん、私はあなたを愛しています。この先もずっと、寛さんだけを、愛し続けています。



虫のカン

クヂラ

虫を吐いた。

友人の家へ向かう道中で、突然こみ上げてきた嘔気に背中を丸めて、道路の脇の用水路に胃の中身を吐き散らかした。そしてすぐに、さて、吐瀉物に塗れたこの虫をどうしてやるうかと考えた。

吐瀉物の前にしゃがみ込み、近くに転がっていた細い枝を拾い上げ、虫の腹を貫く。持ち上げて緩く左右に振って汚れを軽く落とせば、虫の奇妙な色が目に飛び込んだ。

上半分が青い。痛いほどの青。胴体を一周する黄色の帯からは、枝を伝いながら紫色の粘着質な何かが垂れてくる。それが指に触れる前に、枝ごと用水路に投げ込んだ。そこに水はなかった。

膝を伸ばして立ち上がる。虫なんぞに使う時間が勿体ないと思った。幸い、一度胃の中身を吐き散らかしたら体が軽くなった。胃の中にまだ他に虫がいるのではないかという不安は付き纏ったが、それよりも時間の方が大事にするべきものだと考えた。

横目で周囲を見渡して、人目がないことを確認して歩きだす。

「殺さなければ自由でいられたものを」

誰もいないはずの道で、その言葉は真つ直ぐにこちらへ向けられた。恐る恐る振り返ると、用水路に投げたはずの虫が自分に向かって突き付けられていた。ツンと鼻を刺す吐瀉物の匂いと、用水路に溜まった泥の匂いが混じっている。

急な光景に、つい素手でその虫を払い除ける。民家の塀にぶつかった死体が、小さいながらも嫌な音を立てて潰れた。目の前に立っていたのは、初老か中年くらいの、和装の男だった。背が高く、体つきも見た目の年齢に見合わずしつかりとしている。丸い眼鏡越しの目は重たそうでありながら鋭く、こちらを見据えていた。

「虫は喋ると思うか」

草履を擦って、男が隣に並んだ。袴の裾が脛を撫でる。

どこかで見たことがあるような顔だと思った。しかし、どこで見たのかは思い出せないでいる。僅かに香る線香の匂いに、ゆっくりと男を仰ぎ見た。

「どう思う」

「……なぜですか」

「今君が吐いた虫が、何を思っ君の胃から出て来たか」

やっとのことで返事を捻り出すと、男がそう言い放つ。男の言った言葉の意味を、咄嗟に理解することができなかった。

自分自身が虫を吐いたこと自体が初めてで、身の回りでも聞いたことのない現象だったにも拘わらず、酷く落ち着いていた。突然現れた男の存在にも、大して驚きはしなかった。しかし、男のこの問いには狼狽えてしまった。

不思議と、自分が虫を吐いたという非現実さについても、時代錯誤な男の存在の不可解

さについて、可笑しいとは思わなかった。

ただ、まるで男の問いがいつかの道徳の授業のようで、存在しない多数の目に睨まれて  
いるような肩身の狭さを覚えてしまったのだ。

「僕が虫を殺したことを咎めたいのなら、はっきりそう仰ってください」

見下ろしてくる男から目を逸らし、早足にその場を立ち去ろうとする。しかし、男から  
二歩も離れない場所で足を止めた。男の大きな手が、上着をしつかりと掴んでいた。

「はっきり言えと言いなから逃げるのか」

「……誰だつて、見知らぬ人に説教なんてされたくないでしょう？」

なんとか男の手を振りほどこうと藻掻いたが、男の拘束は全くこれっぽっちも緩まな  
かった。恐る恐る振り返つて男の顔を見上げると、男は初めて見たそれと全く同じ表情で、  
じつとこちらを見下ろしている。

「虫を殺めたことをとやかく言う心算はない。私が尋ねたいのは、虫が何を思つて君の中  
で生きていたのかということだけだ」

「……僕は虫じゃないので、わかりません」

男が手を離して歩き始める。自分が男に続いて足を踏み出そうとしていたことに、この  
時初めて気が付いた。

そして、これが夢であるということに気が付いた。気付いたが、目覚めようとは思わな

かった。

夢だとわかると、男の問いの答えを真面目に考えてみようという気になった。

「第一に、虫に意思があるかどうか」

男の隣に追いつく。男は、まるで自分についてくることをわかっていたかのように、全く振り返りもせずに言葉紡ぐ。

道端の電柱にしがみついていた蝶を掌に落とし、その羽を摘まんで持ち上げた。六本の足がじたばたと宙を掻く。

「……あるのではないでしょうか。生きようと藻掻く姿が、意思の表れのように感じます」「つまらん」

蝶を手放した。ふらふらと力のない羽ばたきで、蝶は家々の陰へ消えていった。指先についた鱗粉を上着の裾で拭い、自分の喉奥へ手を埋め込む。ずる、と虫が引きずり出されて、再び嘔気に襲われる。

「それらは何を思っ生きてる」

青い背、黄色い腹。摘まんだそいつをじっと見つめ、また用水路に放り投げた。上手く泥に着地できなかったようで、また潰れた。紫色が広がっていく。

「君は、あれをどう描く」

「……どうって……どういう意味ですか」

「見たままか、抽象するか」

「……えがかないという選択肢は」

「君は、いずれこれを描くだろう」

男は、こちらに背を向けた。蝶が消えていった暗闇に、同じように溶けていった。



「なにその夢」

「いや、俺にも理解できないんだって」

友人は、気の抜けた相槌を打ってコーヒーを一口啜った。僕はスマートフォンで様々な種類の虫を調べている。

「不気味なカラーリングだったからよく覚えてるんだけど、あんな虫この世界にはいそうにないな……」

「なんつったつけ」

「青、腹が黄色。血が紫色」

友人が眉を顰めた。自分の喉元を摩って、小さな声で気持ち悪いと呟いた。

僕自身も、酷く悪趣味な夢を見たと思っっている。虫を吐くこと自体が気持ち悪い出来事なのに、吐いた虫を潰した後に見知らぬ男に虫の気持ちを考える、と言われたのだ。更に、自分の考え方を『つまらない』と一蹴されたのだ。今更ながら、腹が立ってきて爪を噛む。

「で、話しかけてきた男ってのは何者なわけ？」

「知らない。見覚えがあるような気もしたけど、知り合いに普段から和装してるような人はいない」

「結婚式とかで見かけたことがあるとかは？」

「結婚式行ったことねえよ」

僕の投げやりな答えに、友人はわざとらしく溜息をつく。

たかが夢でこんなに悶々とする必要はない、とわかってる。しかし、どうにも男に問われたことが頭から離れず、道を歩いている最中に人間以外の生物を見かけると、つい考え込んでしまうのだ。

「……自分以外の人間の思考もわかんないのに、虫だの他の動物だのの思考がわかるわけないじゃん」

「でもお前、文芸学科だろ？　そういうのに、適当な台詞あてんの得意なんじゃねえの？」  
友人を鬱陶し気に睨む。しかし、何か言い返すことはせずに、ただスマートフォンを画

面に視線を落として黙り込んだ。

男は初め『殺さなければ自由でいられた』と言った。虫は、自由になるために胃から飛び出してきたのだろうか。違う、とすぐに思考を止める。それでは何が違うのか、考えた。僕が潰したことで虫が死んだのではなく、身体の外に出た時点で虫の死が決まっていたのだとしたら。吐かなければ虫は腹の中で自由に生き続けたのかもしれない。しかしそれは本当に自由なのだろうか。

「……井の中の蛙、みたいな……」

「うまいこと言うじゃん」

「胃腸と胃と井戸の井をかけたわけじゃない。やめてさういうの」

友人が立ち上がり、荷物をまとめ始めるのにつられて、携帯を上着のポケットに押し込んだ。

未だ気分はスッキリしないままだが、これから大学へ行って借りていた本を返さなければならぬ。どうしてもこの纏まらない思考を誰かに聞いて欲しくて友人を大学近くのカフェに誘ったのだが、どうやら大学までではついてきてくれないらしかった。

「お前、いつもどうでもいいことばかり考え込むからさ。楽に行こうぜ。夢は夢。虫を殺すことだって、別に悪いことじゃない」

「慰めてんの？」

「優しさを素直に受け取れよ」

思わず棒読みのようになってしまう感謝の言葉を友人の背に投げ、カフェに背を向ける。

なんとなく落とした視線の先に、一匹のミミズが落ちていることに気が付いた。干からびて死んでいるかと思ったが、僅かに表面が脈打っている。

こいつらは、自由を求めて土の中から出てきたのだろうか。死をも覚悟して、こうして過酷なアスファルトの上を這ってみたのだろうか。そこまで考えているのだろうか。この小さな頭の中にある脳みそで、自由とか愛とか、そんな人間臭いことを考えられるのだろうか。

ミミズを摘まみ上げる。すぐ後ろを歩いていたらしい女子学生が息を呑んで早足に僕を追い抜いて行った。顔の高さまで持ち上げて、肌色のそいつを、先端から末端までじっと観察する。

「お前、喋れんの？」

口の中で問いかける。当然返事は返ってこない。自分のしていることが馬鹿らしく思えて、近くの生垣にミミズを放り投げた。

よくよく考えてみると、虫は最初から自由だろう。どこにも金を払わず、目についた相手と番になって、食べられるものを食べて、眠れるときに眠る。生きて種を残せばいいの

だから、愛も要らない。余程自由じゃないか。だとすると。

「……自由でいられなくなったのは、僕の方か」

あの虫を殺したことで不自由になったのは、僕の方だ。虫が腹の中にい続ければ、僕は自由なままだった。あの虫を見てから、この思考に囚われている。

「どんな虫だった？」

コガネムシのような、丸い形をしていた。脚は短くて、触覚は長かった。羽があったかはわからないけれど、か細い枝であっさりと腹を貫けてしまうほどに柔らかかった。

頭の中で虫の形を思い出してから、声の主を振り返る。眼鏡をかけた小柄な女性が僕を見上げていた。

「……誰？」

「カフェに本を忘れてたよ。これ。私、この大学の文芸学科生なんだ。君は？」

「……僕もだよ。届けてくれてありがとう」

女性から本を受け取って、背を向ける。内心、先ほどのミミズに向けた独り言を聞かれました。ではないかと冷や汗をかいていた。一步踏み出して、気が付いた。

「……なんで、僕が虫を見たことを知ってるの？」

女性を振り向けなかった。人に害なんて与えられそうにない女性だったが、それでも怖かった。

背中に女性からの視線が刺さっているような気がして、振り向けないまま何分も立ちずくんでいるような気がする。実際は、一分も経っていないのかもしれない。

「私ね、夢を見たんだ。憧れの先生が夢に出てきて、弱った蝶を拾ってね。この蝶は今、何を考えていると思う？ って聞かれたの。答えを出せないまま目が醒めちゃったんだけど、それがずっと気になって……。そしたら追いかけてた君がミミズを見てるのに気付いてね。もしかしたら、と思ったの」

女性が隣に並ぶ。あの男とは正反対である見た目なのに、夢の光景がフラッシュバックした。女性の話し方は始終穏やかで、それでもどこか恐ろしかった。

ゆつくりと歩みを再開して大学校舎へ近付いていく。

「……僕は、虫を吐いたんだ」

「それは気持ち悪いね」

「吐いた虫を、みんな殺したんだ」

「見ていたくないもんね」

「……殺さなければ、自由でいられたのに。そう言われたんだ。……ねえ、どういう意味だと思う？」

恐ろしいと思いつつも、口は勝手に女性にそう尋ねていた。女性は顎に手を添えると、少し首を傾げて考え始める。しかし、それほど時間をかけず、女性はすぐに僕を振り向いた。

「そのままの意味だと思うよ。虫を殺さなければ、きつと自由なままだったんだよ」

「それは、何が？ 僕が？ それとも虫が？」

「君はどっちだと思ったの？」

「最初は虫だと思った。でも、色々可笑しいと思ったんだ。だって、虫は最初から自由じゃないか。……だから、僕のことなんだろうなと思った」

大学に到着していた。

学生証を読み取って構内に進み、図書館のある西棟へ向かう。僕の言葉に、女性は何も答えないまま僕の半歩先を歩いている。

「先生は、随分お優しい言い回しをされたんだね」

女性が先に、扉を開けて西棟へ入る。それに続こうと扉に手を伸ばすが、軽く胸を押されて思わず踏鞴を踏んだ。一歩下がって、目の前でゆっくりとガラスの扉が閉まっていく様子を見る。

「君は、先生の顔をご覧になったことがあった？ 今度西棟に入るときは是非ご挨拶して  
いってね」

「どういふこと……？」

「先生はきつと、次の世界を作っていく私たちの激励に来てくださったんだと思うの。私たちは特に多感なんだよ、だから先生は私たちの元に来てくださって、大きなヒントを下

さったの。……ねえ。虫籠から飛び出さなければ、自分が不自由であったことすら知らずに死んでいったのにね。それに気付けた私たちは、幸福だと思わない？」

扉が閉まった。

女性はずっと変わらない笑顔のまま、ガラスを一枚隔てた向こう側にいる。

喉が脈打った。熱い激流が胃からせり上がって来て、どこかへ逃げることも叶わずにその場へ嘔吐した。虫が出た。また、青と黄色の目立つ虫だった。

恐らくまだ、腹の中には何匹ものそいつがいる。そいつらが一斉に騒ぎ立てて、僕の気を惹こうとしている。

「虫籠を覗く人はどこにでもいるよ。君も今、君の虫籠を覗こうとしているね。……君も今、誰かに覗かれようとしているね」

女性の背後に、あの男が立っている。

思い出した。すぐそこにある、創設者の銅像だ。あまりまじまじと見たことはなかったが、なんとなく記憶に残る顔立ちをしていた記憶がある。

血の気が遠のいていく気がした。どこか落ち着ける場所へ行かなくてはと足をなんとか動かすと、何か柔らかいものを踏んだ気持ちの悪い感覚がした。

また、嘔気がした。

これは夢だと気が付いた。



目が覚めて飛び込んだ白い光に、ぐっと伸びをする暇もなく全身に強い衝撃が走った。慌てて体を起こすと、嗅いだことのあるような嫌な臭いに包まれていることに気が付いた。すぐに伸びてきた汚くて鋭利な何かが、僕の腹を貫いた。痛くても、声をあげることができなかつた。溢れて来た体液は、紫色だつた。

ようやく自由になれたのだと思つた。長くて暗い夢を見続けていた。それがようやく、光の下で生きていけるのだと、思つたのに。

「君はこれをどう描く？」

僕は何度もこの言葉を聞いている。

いつか夢から覚めたなら、僕はこの体験を書こうと思う。

次の世界を、とか、女性が言っていた意味はよくわからない。男が言っていた通りに虫のことを書こうとしていることも、癪に障らないわけではない。でも、書かなければいけない気がした。

自分を殺してありきたりな物語を紡ごうとすれば、きつと誰でも、腹を突き破ろうとする虫の存在を知ることができるのだと思う。その虫の正体にも、その虫が外に出ようとしていた理由にも、気付けるのだと思う。

夢に出てきたあの男は、本当に、僕らにこのことを教えただけだったのだろうか。誰か、あの男に、正解を聞いて欲しい。



芸術なんて、

くりすていのアヤノ

芸術なんて、正直なくても生きていける。

教室は清潔で、けれど綺麗なわけではなくて、それでも清潔にされているのがひどく気持ち悪かった。吸うことが出来るのは、酔いそうになる消毒の匂いと換気によって外から入り込む八月の温まった空気。熱中症対策よりも優先して行われるそれに少しずつ苛立ちが募ってくる頃だった。

「ねえ、まっちゃん何書いてんの？」

高橋は眼鏡をこれ以上ないほどに曇らせて、見えているのかは知らないが必死に私の手元を覗き込んでいる。かく言う私の眼鏡も少し曇っているわけだが。

「戯曲」

「え、何それ。ギキョク？」

「うん。劇の台本」

「え、このご時世に？」

「うん」

書くくらいさせてくれよと思った。どこかで上演するわけではない、誰に見せるわけでもない、一人で満足するための娯楽まで奪わないでくれよ、と。

「でも、それ書いてるところ誰かに見られたら大変だよ」

「なんで」

「だって、どこかでやるための台本だって思われるかもしれないし」

「やらないよ。出来ないし」

「そうだけど、でももしまっちゃんがそんなの書いてるってみんなに知られたら」

「いい。分からないやつには分からなくていい」

「いやでも」

「うるさい」

ある日誰かが私に言った。これもいつか糧になると。でもそいつは人生の五パーセント未満、たったそれだけの期間しかこの時世と向き合っていない。私の人生はもう、十パーセントほどをそれに占められているのに。これからどうなるかも分からないのに。誰にも文句を言うことは出来ないのに。自分の若い頃のことをやさしく思い出す大人は好きだ。が、それを元に説教をしてくる大人は嫌いだ。そういうものだろう。私の思いなんてものは恐らく聞きたくないのであろうし、聞いたとて受け入れてはくれないのであろう。だからこそ、耳が痛くなるほど聞かせてやりたい。私の今の楽しみと、夢の話。そういうことをしてやりたいと思ってしまう時点で、私も彼らとさほど変わらないのかもしれない。ただ、私が彼らと違うところは会話をしようとするところだと思う。説得ではなく、会話を。ねえ高橋。芸術なんか、本当はなくて生きていけないんだよ」

「いや、そういうことが言いたいわけじゃ」

「本当に、いらないんだよ、芸術なんて。今、潰されていつてるの知ってるでしょう。そういうことなんだよ、いらないものから排除されていくんだから。それでね、私だって、そんなことはとづくに分かつてるんだよ」

誰にいくら否定されても響かなかつたのに、次々言葉を自分で口にするうちにだんだん参ってしまったって、高橋の顔を見ることも出来ない。

「私には、泥で船をつくることすら許されないんだよ、高橋」

「いや、それは」

「そうだよ、誰にも、今は誰にも許されてないよ。でも、このクラスにいるほとんどの人にとつての夢と、私の、この夢は何が違うんだろうね。ねえ、高橋」

頬に、刺すような痛みが走った。鋭い痛みだが、手のひらサイズだった。

「まっちゃんだけは、否定しちゃいけないのやなかか」

出た。これは高橋の、誰にどう思われてもいいから、私のために言葉を吐く時につかう方言。聞いておかねば後悔する叫びだ。

「まっちゃん、どうしようもなかね。そがん卑屈なことばっかし言うて、どがんなるとか」  
「でも、書いても叱られ、書かずとも叱られ、もう何も出来ないんじゃないかと私は本気で思ったんだよ」

「それくらいんことでやめると？」

高橋の目は光をたたえていた。眩しくて見ていられないのか、悔しくて見ていられないのか、私はどうしても目をそらしてしまう。

「は、なんだよ、それくらいって」

「そがんことくらいでやめるんじやったら、さっさとやめてしまえばよか」

「うるさい、うるさいうるさい」

聞かねば、後悔する。

「誰にも反対されんのが成功なんか。自己満足で飯が食えるとか？」

握り拳に力が入っているのをようやく自覚する。手のひらには爪の跡。

「悔しかか、まっちゃん」

「ああ、もうそれはそれは悔しいよ。全否定された気分だ。でも」

自分で自分を否定するより、こっちの方がよっぽどいい。



等身大

金子  
汐音

深夜二時三十三分。冷房が絶え間なく音を立てて冷風を送る音がする。自分は働いているぞと言っているみたいで腹が立つ。狭いワンルームのなかで、締め切りを三日も破った馬鹿が一匹パソコンに向かっている。

バイト先の服を脱いで、インナーシャツと生理用パンツだけの格好で仮眠をとり、目が覚めていま。昨日は蒸し暑く、時おり雨も降っていて、その余韻が身体がこころなしかべたついているように感じる。ちくしょう。せめてお風呂には入っとくんだった……！

思えば、地元大阪にいた時から期限と名のつくものをまもられた試しがない。本の返却期限日も、友だちとの待ち合わせの時間も、いつもまもれない。気がつくといとエイと過ぎ去っている。わたしは根が真面目なので、その都度反省し、その都度謝ってみせる。「それ、いつもそうやん」と冷静なわたしが冷めた目で私を見て、その都度許してくれる人々にまた深く頭を下げる。最初から最後まで、期限はまもらなくてはならないという意思や緊張や焦りはあるのだ。

わたしがいわゆる「気にしい」なのも、友だちや先生に叱られると次にどんな顔で会えばいいのかわからなくなることも、そういうわたしのだめなところってきつとぜんぶ見透かされている。そのうえで友だちだと思ってくれているのだろうか。

わたしに声をかけてくれた、この本に参加しているみんなの顔がじゅんぐりに浮かんだ。みんな「日芸生」だ。運悪く（本当に不運なことに。厄年は終わったのに！）コロナ禍に

入学した私たちは、それでもようやくお互いの顔を認識し、文芸ラウンジや画面越しなんかでたまに顔を合わせては近況を報告するようになった。コロナが消えてなくなればいいのにといいセリフをもうこれでもかと言いつつ、ついに誰も言わなくなるまでの時間が経過していた。

日芸生の話は面白い。日芸生も面白い。個性と個性で殴り合うのが通常運転だ。流行りの曲や時事ネタやSNSの話よりも、個人の内面の話が多く飛び交う。誰とでもできる話よりも、その人でないとできない話をする人が多い。それはすごく刺激的でユニークな内容ばかりだ。そうして互いに思考を深め、創作に還元していく。日芸生と話をするだけでインスピレーションが湧くということは、おそらく多くの日芸生が体験しているだろう（なにを隠そうこの誌もそうやって誕生した。らしい）。

立ち上がって、床にべったりうつ伏せになった。暑い。フローリングのうえでパタパタ脚を左右に揺らす。冷風があたって気持ちいい。がしかし、首がじっとりしている感覚が拭えない。明日デートなのに。机のうえの酒缶と、取り込んでベッドに投げ出されたままのハンガー付きの衣服。待ち合わせは二時。なんでやねん。だめすぎる現状に頭を抱える。社会不適合の文字がよぎって、モンスターエナジーで流し込む。

日芸生の間で（というか文芸学科生の間で）、この「社会不適合（社不と略される。言葉から受けるだめさ加減はいくらか緩和されるものの、略すという怠惰な行為そのものが

もうどうしようもなさをおわせる」という言葉はよう登場する。引き合いに出されるのは「普通の」大学の「普通の」学生である。社不だから単位落とした。普通科ならともかく就職したくない。締め切りまもれない。ポップでキャッチーで簡潔な、自称として。卑下として。

「ごめんなさい」三時半。ふと言葉が漏れる。もう誰に謝っているのかもわからない。ネガティブモードに突入すると書くどころかデートも断りかねないので、気持ちを切り替えて身体を起こす。ベッドのうえには今回の資料にと貸してもらった日藝ライブラリーが置いてある。松原寛特集。「日芸魂の源流」。この誌の企画のせいで（おかげで？）親の顔より見かけた松原寛先生の銅像。実物よりもなんだか凛々しく大きく見える。ほんとはもつと華奢なのにな、と会ったこともないのに思った。その横には黒字の「日芸魂」。

日芸生。の、魂。わたしだって、きっと社会不適合を自称する日芸生みんな、本当はほんとうに芸術にだけ生きていたい。社会ってなんだ。世間ってなんだ。自身の欠落から目を背けて、それを見せつけてくる安定して生きていくためのルールを著しく脱線して、自分の世界を言語化して言語化して言語化して、そうやって生きていきたい。そしてそれはとても恐ろしいことだ。「普通」にはなれない。なりたくない。でも「普通」から離れざるものも怖い。芸術に寄りきれない自身の弱さがいちばん嫌い。日芸魂ってなんですか。まるで波だ。悲しみと怒りとやるせなさと、あと時々ほんのすこしの希望が、押しては

引いてを繰り返している。デート。ああ、デート！遮光カーテンの隙間から漏れでる白いひかりを完全に遮断する。机のうえの缶を適当に掴んで揺らしてみる。音がしない。煙草を探そうとして、テンプレートな大学生を真似ているみたいな気がしてきてやめる。ちくしょう！

この春、法の上で大人になった。二〇〇一年生まれの人間はみんなこのコロナ禍で大人になっていく。わたしたちが高校三年生の、冬と春のちょうど境目に、日本に新型コロナウィルスが蔓延し始めた。そのせいか、宙ぶらりんな感覚が胸の中に巣食っている。大学生だという実感もないが、高校生である自覚もない。高校卒業後の春休みの、延長線上にいまがある感じ。大人ってこんな子どもなの？ 大学生ってこんなに幼いの？ みんなも「普通」はそう？ 綱渡りをずっと続けているような気分だった。揺れる。おちる。踏みとどまる。踏みとどまれている？ 疲れた。目の前が暗くなる。目を閉じているのだと気づく。気づくまで気づけなかったことが可笑しい。わらう。つかれた。

夜の二十時五十分。結局原稿は間に合わずに彼氏には家まで来てもらい、お家デートと辛うじて呼べるような呼べないような時間を過ごした。休憩がてら江古田駅まで彼氏を見送る。引き留めてしまいたいそうになるから振り返らずに駅の階段を降りた。日芸生の姿を写したポスターが、階段横の壁に貼られている（受験した時にも貼ってあったので、彼らは

おそろくもうとつくに卒業していると思われる)。誰もが真剣そうに、あるいは楽しそうに芸術に打ち込んでいる。大人だ。わたしがなれると思っていた「大人」で「大学生」だ。松原先生もこれならにつこりだろうな。さつきまで彼氏に引かれていた右手を握り込んで、二段上から飛んだ。

メロンパン屋からハンバーガー屋になりつつあるテナントを通り過ぎる。長袖のスウェットで出歩いても汗をかくことなく、穏やかな風に吹かれながらまた家までの道を引き返していく。日芸の前の信号はどうしてこんなに青信号が短いのだろう。阻むな。

日芸の輪郭を沿って歩く。カップルとすれ違ふ。A棟の横の酒屋のラインナップが想像以上に良かったことを思い出す。寄ろうか迷ってやめた。外を歩きながらスマホに文字を打ち込む。そんな暇も余裕もわたしにはない。社不も社不だ。決定的になってしまふ。

無数に貼られた「百藝」のポスターを横目に、学校を抜ける。今年で百年。松原先生の日芸魂は、百年後も現存しているのだろうか。社不というキャッチーな言葉で傷つけられる前に傷つけているわたしは、わたしたちにも、日芸魂は宿っているのだろうか。

「百年って、百合の花だって咲いちゃっ」

誰も聞いていないのに独りごちる。漱石の夢十夜がぱっと浮かんだ。美しい名文も、「普通の」文学部を目指していた時の名残りのように思われて鼻がツンとした。英文法も歴史も数式も、もうひと欠片ほどしかわたしのなかには残っていない。それでも授業を聞き

流してこっそり読んだ教科書の一文や挿絵は、いまでも鮮明に思い出せるのだった。

文学部がある普通の大学ではなく、選んで日芸に来た。変人上等、個性は尊重。そんな校風に惹かれた。特別な子がたくさんいて、特別な子になれるのだと思っていた。確かにいくつか物語を書き、予想外の価値観にも触れ、本も読んだ。地元に戻れば「すごいね」だとか「さすが芸大」とかなんとかわられることもある。でも、日芸の無数にいる特別のなかだとその程度の「特別」は「普通」に思えてしまう。

松原先生。日本の芸大の実技教育を何より重要視した、感激屋のおじさんだったらしい。物に溢れた令和の世でコロナ禍でも精一杯の実技教育を実現させる日芸で、わたしは劣等感に喘いで悶えて、遂には不貞腐れて行き詰まって怠惰に溺れ、なんだか「普通」の大学生になっけていきます。松原先生。わたし、書かなくても生きていけるのでしょうか。ほんとうのところ、それがいちばん怖いんです。特別になりたい。芸術に生きたい。日芸生のわたしは日芸魂を持たないけど、日芸魂が欲しくてたまらない。

中学校が建つ角を曲がる。金木犀のにおいして、思考がとまる。顔を上げると、中学校の敷地内に木があった。深い緑の硬い葉は、夜の中では濃紺に見える。染み入るようなまじ秋のにおい。今年初めて嗅いだ。目を瞬かせると、水が音もなくアスファルトに落ちた。視界が歪んでも不自由なくスマホに思考を入力していたことに、嫌な慣れだと思った。ふと次のデートに着ていこうと買った花柄のワンピースが、セールになっていた理由に

気がつく。秋がくる。その次には冬が。彼が、冬はだめだと言っていたのを思い出した。秋はどうだろう。LINEしようとして、話題の恋愛映画のエモいとかセンチメンタルとか、そういうキャッチコピーを苦虫かみ潰したような顔で敬遠していた様が浮かび、やめる。今度聞けばいい。

自分がこんな形でわたしの文章に登場しているとは思っていないだろう彼をおもうと、してやったりという気持ちになる。彼とのことをあまり友だちに話さないの、これを読む友だちがどんな反応をするのか、むず痒い気持ちになる。書くのは、たのしい。わたしに分かるのはそれだけ。それだけでここに来て、ここにいる。

インスタを開いた。日芸でできた友だちのストーリーを眺める。松原先生とのツーショットが表示されて、マスクのなかで思わず嘖き出す。「変わってんなあ」悲しいような嬉しような、言語化できない気持ちになる。

社下でも就職したくなくても酒飲みでも、税金は払いたくないし、起きたい時に起きて食べたい時に食べて、寝たいだけ寝たい。本を読んで文章書いて、褒められて褒められて時々チクツとアドバイスを受けて、そうやって生きていきたい。友だちのことを劣等感なしに愛していたいし、彼氏には恋していたい。特別になりたい。作家になりたい。人生。百年なんていらなから、そんな特別な十年が欲しい。日芸魂を、燃やして生きたい。頭のなかで松原先生が苦笑している。コロナ禍で抑圧されているんだから、これくらい言う

だけ無料やろ。

願望だけをつらつら書き連ねて、変な文章でも誰かに刺さればいいと思う。心を動かせられたらいい。多分めちゃくちゃ情けない等身大のわがままだけど、わたしとおなじ普通の人が「分かるよ」って笑ってくれたらいい。たのしくなれば、もうなんかそれってwin-winだ。

日芸魂を持つてなくてもわたしは日芸生で、時間はわたしを大人にしていき、いまこうしている間にも締切超過期限は過ぎていく。このまま卒業して大人みたいな振りをすることも、多分わたしは出来るだろう。でもまだ書くことがたのしいと思えてしまうから。だからいっぱい負けながら悶えながら、食らいついて日芸魂を宿らせた。松原先生。百年待てたならどうか、もう二年待っていて下さい。



おくりび

田口 愛理

餞 はなむけ

おまえのからだはつめたくなつた  
ちいさく棺が口を開けていた  
おまえのむらさき色のくちびる

おまえは口を利かなくなつた  
薬缶のありかを尋ねても  
返事はもうかえつて来なかつた  
あわれで孤独なおまえ

病めるおまえがみたものは  
たしかにすつと彼方へのびる  
しろき御手ではなかつたか

ああおまえの祈りを奪つたのは  
おまえが死のあわいで血まじりの  
声をしぼって叫んだ男なのだよ

おまえの微笑みをしるすべもなく  
わたしはつみなき罪人となつて  
とむらいの幕をおろした

## かはたれ時

眠りをさまして夜をあるいていった  
あなたの祈りがまだ白くひかつて  
わたしは懸命にかきあつめようとしたり  
あなたの形をおぼえたいばかりに

たどりついた先には  
ひとつの偶像がたたずんでいた  
かなしみの旋律がきこえて  
あなたの声ではない誰かの祈り

わたしは触れたい

ひかりの先のかたく組まれた指に

けれど夜は明けるかつて交わされた

言葉たちはくだけてゆく……

あなたが忘れさつてしまつても

その無垢なひとみを

わたしはみつめ続けていたい



寛容

山根  
麻耶

【登場人物】

男 1

女 1

女 2

松原寛先生

○西棟一階エレベーターホール・松原寛先生の銅像前・朝

女、立っている。

男、走ってドアから入ってくる。

男 1 「(息切れしながら) ごめん、遅れた」

女 1 「遅い！ たっくいま何時だと思ってるのよ！」

男 1 「えっと、えと……八時半」

女 1 「八時に来いって言ったじゃん」

男 1 「な、なんでよ。なんでそんな早いんだよ」

女 1 「一限までになんとかしないとだから」

男 1 「てか、無理でしょ」

女1 「やるの！」

男1 「無理だつて」

女1 「なんのためにあんた呼んだと思つてんの」

男1 「いや冷静に考えて無理なんだつて。だつて、胴体だけで六十五センチもあるんだろ。

そんなの無理だよ」

女1 「いいから早く。ほら、電動のこぎり持つてきた？」

男1 「持つてきたけど。やだよ」

女1 「なんでよ、はやく切つてよ」

男1 「やだつて」

女1 「早くしないと先生来ちゃうでしょ」

男1 「そんなことしたらまじで退学だけで済まされないよ」

女1 「寛先生なら許してくれるのー」

男1 「もういないじゃん」

女1 「いるじゃんここに」

男1 「いやここにはいるけど。まじでだめだつて」

女1 「いいの。やるの」

女、男の背負っていたリュックサックのチャックをあけ、電動のこぎりを取り出す。

男1 「おいちよつと待つて」

女1 「やだ、やるの」

男1 「まじで一回落ち着いて、な。まじで」

女1 「いや私は落ち着いてるよ。あんただよ落ち着いてないの」

男1 「まじでやめよ？」

女1 「だいたい、あんたもちよつとやりたかったんじゃないの。じゃなかったらわざわざこんなもの担いでこないでしょ」

男1 「いやそんなことないって。てか冗談だと思つてたし」

女1 「私は本気だよ」

男1 「まじでやめて、一回、一回冷静になる？」

女1 「だから私は冷静だつて」

男1 「そもそもなんでそんなにしてまで銅像奪いたいんだよ。てか奪うならもつと夜中とかさ、人がわからない時にやるだろふつう」

女1 「いや。夜だと警備されてそうじゃん」

男1 「まあそうかもだけど」

女1 「だから朝早くやればいっかなあつて」

男1 「てか健康カン察システムでバレるっしょ」

女1 「え？」

男1 「さつき、通してきたでしょ、学生証。ギャラリー棟で」

女1 「ああ、通したね」

男1 「あれでバレるって、犯人」

女1 「確かに〜！ あんた意外と冴えてるね」

男1 「まあな。つてそうじゃなくて」

女1 「なんであんたはそんなに私を止めるの」

男1 「いやだつてだめだろ。器物損壊どころの話じゃないよ。大ニュースだよ。日本大学

藝術学部、創設者の銅像が盗まれる。みたいな」

女1 「いかにも藝術大学ってカンじでかつこいじゃない」

男1 「でもあれだよ。日大が日大がつて騒がれるよたぶん」

女1 「うわーやだわ」

男1 「でしょ？ 日大だから、とか言われるよ」

女1 「せめて日藝って言ってほしいな」

男1 「それこそ日藝の株下がりまくりだと思っけど」

女1 「まあ確かに」

男1 「つてことでやめよ？」

女1 「やーだー。やるの」

男1 「なんでそんなにほしいのさ」

女1 「私の寛先生にしたいの」

男1 「え、なにそれきも」

女1 「悪い？」

男1 「てかお前この前好きな人できたつて言つてたじゃん。いいのかよ、そんなこと言つて」

女1 「え、ちよつとやめてよ恥ずかし」

男1 「なにが恥ずかしいんだよ」

女1 「いやだつて」

男1 「なに」

女1 「私の好きな人、目の前にいるから」

男1 「(自分のことだとカン違いして) ……え、ちよ。え、うそだろ」

女1 「な、内緒だよ？ 誰にも言わないでよ、ぜつたい」

男1 「い、言わねえよ」

女1 「ふふっ。ありがとう」

男1 「……おう」

女1 「あ、やばい。言っちゃった」

男1 「え？」

女1 「聞かれちゃったかもな」

男1 「誰に？ 何を？」

女1 「私の好きな人に、私の好きな人を」

男1 「聞かれたっていうか、今聞いているんだけど」

女1 「え、そうだよね。どうしよ、恥ずかしいやばい」

男1 「いやこつちのがやばいから」

女1 「え、なんで」

男1 「いやだつてなんかほら突然のアレだったし」

女1 「まあ、たしかに。言つてなかったもんね」

男1 「う、うん」

女1 「実は……ずっと前から、好きでした」

男1 「……」

女1 「付き合えだなんて言いません」

男1 「え、なんで」

女1 「(無視して) あなたは、恋という恋を知っていますから、私なんかでは到底交際できない存在であることは、重々承知しております。だから、一生そばにいさせてください。松原寛先生」

男1 「……は？」

女1 「い、言っちゃったあ〜〜！ やっぱああい」

男1 「え、ちよ、え」

女1 「なに、どうしたの」

男1 「いや。え」

女1 「なに」

男1 「あ、いやなんでも、ない」

女1 「そう」

男1 「うん。……え、好きな人って」

女1 「(遮って) 寛先生だよ」

男1 「いや、え」

女1 「何、悪い？」

男1 「いや悪いとか悪くないとかないけど」

女1 「じゃあいいよね。先生のこと奪っても」

女、電動のこぎりを松原寛先生の銅像にふりかざそうとする。

男1 「いや、え。ちよ、やめろ！」

男1、女1を後ろから抱きしめる形で止める。

女1、止まる。

女2、ドアから入ってくる。

女2 「きゃあ！」

男1 「え」

女1 「(男1から離れて) きゃあああああ」

女2 「うそ。え、ふたりってそういうカン係だったの。え、うそちよと待ってえ」

男1 「違う、そういうんじゃない」

女1 「え、ちよとなんでいんの」

女2 「いやなんでって、授業だし」

男1 「まじでなんかちがうから、カン違いしないでまじで」

女2 「むりむり、え、頭が追いつかない」

女1 「やめて、私たちそういうんじゃないから」

女2 「じゃあなんでふたりでなんかこの奥まったスペースでこそそしてるわけ朝っぱらから」

男1 「それはえっと」

女1 「(泣き出して) 違っから。ごめんなさいいい。わたし、浮気するようなタイプじゃないの。こいつが勝手に後ろから抱きついてきただけなの。だから違っしやめてほんとにいい」

女2 「え、いきなり、勝手に？ え、やば」

男1 「ちが、それも誤解だつて」

女1 「何してくれてんの。なんでよりによって寛先生の前でさああ。もうやだああ。もうぜんぶやだああ」

男1 「まじで一回落ち着いて」

女2 「いや君がね？」

男1 「う、うん」

女2 「で、二人で何してたわけ？」

女1 「共同作業」

女2 「やっぱりそういうカン係だったんじゃない」

男1 「いやカン違いだつて」

女2 「じゃあ何してたのよ」

女1 「好きな人を、奪つてたの」

女2 「え、まさか君も寛先生のこと好きだったの？　じゃあふたりは恋のライバルつてこと？」

男1 「え、いやそういう奪つてたじゃない」

女1 「あ、まじか。それであんたさつきあんなに焦つてたのか。私が寛先生に告つた時」

男1 「いやだからそうじゃない」

女1 「もうなんなのさつきつから何が言いたいのかあんたは」

男1 「いやもうこつちが聞きたいよ」

女2 「整理しよう」

男1 「うん」

女1 「私は、寛先生を奪おうとしてたの。で、そのために彼を呼んだの」

女2 「うん」

女1 「そしたら、だめだつて止められたの。止めるときに、彼が私に抱きついてきたつて

わけ」

女2 「君、けっこう大胆なんだね」

男1 「いやだから違うって」

女2 「何が違うのよ」

男1 「物理的に奪おうとしてるから、やめろって無理矢理止めただけだよ」

女2 「え、銅像奪おうとしたってこと？」

女1 「うん。だめ？」

女2 「だめではないと思うけど」

男1 「ええ」

女1 「だよね。別にいいよね」

女2 「うん。いいと思う」

男1 「なんでそうなるの。待って、ちょっとまじで。え」

女2 「いいけど、ちゃんと許可取った方がいいと思うよ。寛先生に」

男1 「なんでそうなるんだよ。てかも寛先生はいないから」

女1 「いるもんここに」

男1 「そのくんだりさつきやったからもういいって」

女2 「いるよ。先生はここにいるよ」

女1 「ね、だよね、いるよね、ね、寛先生」

男1 「いないって」

女1 「いるもん！」

男1 「いないだろ」

女2 「いるよ！」

男1 「いな」

寛先生 「(遮って) いるよ、ここに」

男1 「なわけないだろ。……今誰か違う人の声しなかった？」

女1 「え、いまあんたが言ったんじゃないの」

男1 「なわけ」

女2 「いまの声、男の人だったじゃん。君しかいないじゃん」

男1 「違うって」

寛先生 「だから、いますよ。ここに」

女2 「だれですか」

男1 「え、こわいこわい」

寛先生 「私ですよ。わたし。ほら、今あなた方の目の前にいる」

女1 「え、もしかして」

女2 「うそ、え！」

男1 「ちよつとどういうこと」

寛先生 「カンづいたようですねえ」

女1 「好きです！ 付き合ってください！」

寛先生 「先程は交際なさらなくても良いと仰っていましたが、違うのですか」

女1 「あ、いやえつとさつきはそう言ったんですけど」

女2 「そうだよ、つきあえるならつきあっちゃおうよ」

男1 「え、二人とも誰と話してるのまじで」

寛先生 「そこのお坊ちゃん、私が見えないのですか」

男1 「え、見えないです」

寛先生 「そうでしたか。あなたの目の前に立っているというのに」

女2 「そうだよ、なに言ってるの。寛先生、君の前にいるじゃない」

男1 「どういうこと」

女1 「だから、寛先生。いるでしょ、目の前に」

男1 「……え、寛先生が、しゃ、喋ったってこと！」

女1 「いまさら？」

男1 「え、待って。どういうこと」

寛先生「申し遅れました。私、松原寛と申します」

女1「か、かつこいい……！」

女2「ね、やつぱ付き合った方がいいよ」

女1「やつぱり？ 私もそう思う。だって京大卒で日藝創設者だよ。で、この背の高さだ

よ？ まじ三高すぎ」

男1「基準ちよつと古くない？ てか背の高さは台座で盛ってるだろ」

寛先生「三高つてなんだね」

女2「そつか知らないんだ」

女1「寛先生みたいに、いい男つてことですよ」

寛先生「いやあ、私はいいい男ではないですよ」

女1「そんなことないですよ」

寛先生「私はもう、恋愛なんて懲り懲りです」

女2「ああ、そつか」

女1「そ、そうですよね……。先生、だいぶ恋多き人生ですもんね。私なんて、だめです

よね……。わかつてました、わかつてはいたんですけど。好き、なんです」

寛先生「すまん」

女1「だ、大丈夫です……。わ、わかつてたんで。先生の女には到底なれないって、わかっ

てたんでええええ」

女2 「な、泣かないで」

寛先生 「だから言ったでしょう。私は、いい男なんかじゃないんだ。ああ、また女を泣かせてしまった」

男1 「なんなんだよこの人たち」

寛先生 「申し訳ないな。第一、私はここの先生だから学生とは付き合えないんだ」

女1 「そ、そうですよね。でも、大丈夫です。私も先生みたいに、この失恋を、藝術の糧にしますから！」

寛先生 「ああ、それは良いことだ。破局を経験してこそ、真の藝術や文芸を味わうことができるのだから」

女1 「寛先生……！」

女2 「よかったね。元気になってよかった」

女1 「うん。私、もつと頑張る。寛先生に認めてもらえるような、立派な日藝生になる」

女2 「そうね。私もそうする」

男1 「じゃあ、俺も？」

寛先生 「いい心構えだ。それでこそ、日藝生です」

男1 「そ、そうなんですか」

寛先生「ああ。知識を得て、何かを経験し、努力することこそが藝術には必要なんですから」

女1「わかりました。頑張ります！」

寛先生「ああ、ともに頑張ろうではないか」

女1「……私、もつと知らないとな。色々」

女2「色々って？」

女1「寛先生のこととか、日藝のこととか」

男2「ああ、そうだね」

女1「まだまだ、寛先生の女にはなれないもん」

男1「一生なれないと思うけど」

女1「うっさい」

男1「ごめん」

女1「ねえ、寛先生。何を知っていれば、私たちはもつと日藝生らしくなれると思います

か？」

寛先生「……」

女2「あれ、寛先生？」

男1「え、いきなり消えた？」

女1「寛先生！ 寛先生、寛先生。……話してよ！」

間

女2 「なんか、自分で探してって言うてるのかも」

女1 「え？」

女2 「日藝生らしさは、自分たちで探しなって、寛先生言ってるんじゃないかな」

女1 「ああ」

男1 「日藝生らしさ、ねえ」

女1 「……よし、やめた！」

男1 「え？」

女1 「寛先生のこと、奪うの辞めた！」

女2 「そうなのね」

男1 「まだ諦めてなかったんだ」

女1 「うん。でも辞めた」

女2 「なんで？」

女1 「なんか、私だけの寛先生にするのは、違う気がしたから。寛先生は、みんなの寛先生だから」

女2 「そっか」

男1 「まあ、確かに？」

女1 「奪うより前に、もっと色々知らない。日藝のことも、寛先生のこと、わたしじしんのことも」

男1 「う、うん」

女1 「なんか文句ある？」

男1 「いや、別にないけど。なんかよかった、と思って」

女1 「そう」

男1 「うん」

チャイムが鳴る。

男1 「これなんのチャイム」

女1 「なんのつて、授業の始まりじゃない？」

女2 「え、やばいもう九時だよ。一限のチャイムだよこれ」

女1 「やばいじゃん。五階までダッシュしない」と

男1 「とりあえずその電動のこぎり返して。授業で使うから」

女1 「そっか、あんたは地下か」

男1 「うん、今日もあるから、彫刻」

女2 「すごいねえ」

女1 「うん。寛先生とも話せたし。はい、これ」

女1、男1に電動のこぎりを返す。

男1 「おう。じゃあ、そういうことだから」

女1 「うん、ありがとう。またね」

男1、階段で地下へと下がっていく。

女2 「私たちも行くよ」

女1 「そうだね」

女2、急いで階段を上る。

女1、寛先生の銅像の前で立って先生を眺めている。

女2 「ねえ、授業始まつちやうよ」

女1 「はい、今行くから〜！」

女1、女2のいった階段の方へと去る。

寛



長崎—東京寛、三十日

本間 日菜乃

○登場人物

松原寛

老人

○長崎・線路沿い・夜

寛、線路沿いをひたすら歩いている。

その横を通り過ぎる鉄道。

寛、急に立ち止まりしゃがみこむと鞆から握り飯を取り出してかぶりつく。

そこにひとりの老人が通りがかる。

老人「ぼく、どうしたんだい？」

寛「……」

老人「もう日も落ちた。おうちは？」

寛「……」

老人、一心不乱に握り飯を食べる寛を見て隣に座る。

老人「おっかさんのかい？」

寛「……………（無言で頷く）」

老人「……………わしも昔はよく食べていたのお」

寛、ちらりと老人を見る。

老人「実家が農家だね。米だけには困らなかったんだ」

寛「……………」

寛、もう一つの握り飯を差し出す。

老人「いやいや」

老人、寛の手を押し戻す。

しかし、寛はさらにぐいぐいと押し付ける。

しばしの小競り合い。

老人「……まったく、食べないと大きくなれないつちゅうのに」

老人、そういつつも握り飯に口をつける。  
そして懐かしそうに遠くを見る。

老人「……どこへいくんだい」

寛「……」

老人「わしが一緒に行つてあげよう」

寛「……」

寛、俯いたまま無言になる。

しばしの沈黙。

寛「……………親戚のところ」

老人「なんだつて？」

寛「東京の……親戚のところに行くんだ」

老人、一瞬驚きの表情を見せるも優しく寛の頭を撫でる。

老人「用事があるのかね？」

寛「……（無言で頷く）」

老人「……東京か。わしも大昔に住んでおったよ。あんどきやあたまげたなあ」

寛、急に顔をあげ目を輝かせる。

寛「（身を乗り出しながら）東京！ 東京、知ってるの？」

老人「数年だけだがね。いい思い出だよ」

寛「東京つて、どんな感じ？」

老人「あん時は明治の初めだったからまだ前代の名残があつてねえ。坊やも知ってるだろ

う？ お侍さんが馬車に乗ってたんだよ」

寛「す、すつげえ！」

老人「ああ。先生によく牛鍋をご馳走になったりもしたもんだ」

寛「先生？」

老人「帝大の先生さ」

寛「てつ、帝大！？」

老人「わしは帝大ではなかったんじゃが、先生がありがたいことに一緒に研究してみないかってねえ」

寛「じゃあ中に入ったことも！？」

老人「もちろん、毎日のように入り浸っていたよ。私の通った錦町から医学校の鉄門を見に行ったこともあったか」

寛「いいなあ、僕も見たい！」

老人「おや、帝大に興味があるのかね？」

寛「(頷いて) だつてカッコいいもん」

老人「格好いい……か。……坊や、勉強は好きかい？」

寛「大好き！」

老人「(笑いながら) うちの孫にも聞かせたいよ」

寛「色々知れるのが楽しい。もつと勉強したい！」

老人、「再び寛の頭を撫でる。

老人「……坊やはきつと、日の本を変えられるよ」

寛、ぽかんと老人を見る。

老人「これからもっと勉強して、帝大にお行き。坊やならきつと行ける」

寛「……ほんと？」

老人「ああ。目を見ればよく分かる」

寛「……でも父さんは学問はいらないうんた。中学まででいいって」

老人「……」

しばしの沈黙。

老人「……でもいきたいんじやろう？」

寛「……………」（頷く）」

老人「じゃあ説得しなきゃねえ。わしも東京の大学に行くって言った時は猛反対を食らっ

たが……」

寛、不安そうな目で老人を見る。

老人「(寛の肩を叩いて) 大丈夫じゃよ。熱情さえあれば」

寛「熱情？」

老人「ああ。何事も熱情無くしては動かん」

寛「それってどうやった手に入るの」

老人「心に沸き立つ感情じゃよ。無視できない大きな感情に出会ったら、その通り進むと

いい。それが熱情の原点じゃ」

寛「……」

寛、急に立ち上がる。

寛「僕、行くよ。帝大に行く！……それで色んな人に教えるんだ」

老人「なにをだい？」

寛「勉強の楽しさを！」

老人、につこりと笑う。

老人「いいじゃないか、その意気さ」

寛「よしっ！ ……つてこうしちゃいられない、もう行かなきゃ」

老人「行くつて……」

寛「東京！」

老人、呆気に取られたように寛を見るが、すぐに笑い出す。

老人「そうか、そうじゃった、東京の親戚のところに行くんだつてねえ」

寛「……親戚なんていないんだ」

老人「なに？」

寛「東京に親戚なんかいない」

しばしの沈黙。

老人「……人は誰しも孤独から始まるものだよ」

寛「……」

老人「誰も知らないところに飛び出すのは勇気がある。心細いし不安だろうが、そこに根を張ることは新たな希望になじやろう」

寛「じゃあここから飛び出して……」

老人「かといって歩くのは大変じゃ、ここから何千里かかるか……」

寛「熱情があるから大丈夫！」

老人、困ったような顔をする。

老人「その熱情を勉学の方に向けてはどうか？ 東京の学校に受ければ堂々と鉄道で行

けるだろうか？」

寛「……」

老人「実は勉学とは生きるための足なんじゃ。その足さえあれば東京はおろか、どこへでも行けるぞ」

寛「本当に？」

老人「もちろん。世界や宇宙、想像の中にだって行き放題じゃ」

寛「想像の中……」

老人「人は他人の想像の中に生きとるからな。勉強を極めるといのはそんな他人を理解  
することでもある」

寛「じゃあ勉強を頑張れば父さんのことも？」

老人「(頷きながら) その理解は説得につながるじゃろう」

寛、少し考え込む。

寛「分かった。勉強の足で進めるように頑張る」

老人「(胸を撫で下ろしたように) それがええ。今日のところはおつかさんの美味しいご  
飯を食べて、あったかい布団で寝るんだ」

寛「……許してくれるかな」

老人「当たり前じゃないか。話したらきつと分かってくれる」

寛、不安げな表情になりながらも頷く。

老人「(立ち上がり手を差し出して) さ、一緒に帰ろう」

寛、老人をしばし見つめる。

寛「手に飛びつきながら）うん！」

老人と寛、連れ立って歩き出す。

老人「そういえば名前は？」

寛「寛平！ 松原寛平」

老人「寛平……か。きつと大物になるぞ」

二人の背中が小さくなっていく。

寛

拝啓、これから学ぶ君へ

馬場  
楓

文芸学科へ行くには、必ず西棟のガラス張りの扉を通る必要がある。文芸学科の活動は主に西棟の五階で行われているからだ。つまり、西棟へ行くのに西棟の扉をくぐるのはごく当たり前のことであり、これから話すところのあるものを見るのもまた当然であるという話だ。そう、そのとあるものことなのだが、扉を開けてすぐ左を向くとある。台の上のせられた一つの銅像、これが今回のメインテーマだ。この銅像はとてもすごい人物のもので、名前を松原寛という。日本大学芸術学部の初代芸術科長を務めた人であり、また芸術を学問としてひとまとめにした人でもある。私たち日芸生は、この人物のおかげで大学に通えているということだ。

と、堅苦しい説明をしてしまったが、要は我々が創始者様ということになる。大方創始者という人物の印象は小、中学校の教頭先生のようなもので、あまり印象深く残っていることはない。それについて講義があった、興味があったから自力で調べた、といったアクティブな活動がなければ詳しく知らないで卒業する人物がほとんどだろう。当たり前だと私は思う。むしろそれが当たり前でない大学は少し寒気がしてしまうかもしてない。否でも、こうしてこの文章を読んでくれているあなたは、もしかすると興味がある稀な存在なのかもしれないのだが、まあ大方の学生にとって創始者なんぞあまり覚えていないものである、というのを理解してほしい。

私はというと、創始者に興味は湧かないタイプである。ではなぜこのチームに加わった

か？答えは簡単だ。このコロナ禍の中でやれるものはすべてやりたいと思ったからだ。不思議な行動しかり、まじめに企画したものしかり。何でもやってみるべしと私は思う。やってみて初めての発見もあると思うし、次につながるキーポイントが生まれるかもしれない。何事もなさねば見えてこないことはたくさんあるのだ。だから私はこのチームに加わり、こうして松原寛について書いている。実際のところ何度も失敗し何度も書き直した。何度もあきらめそうになったが、この経験はきつと別のところで生きてくることになるかもしれない。故に私は、この企画に参加したことを後悔しないだろう。

松原寛、と聞いた際、やはり一番最初に思い浮かんだのはあの銅像だった。私は文芸学科に所属しているため、一年の時からあの銅像は目に映っていた。その銅像が松原寛その人であると知ったのは最近だが、印象には残っていたのである。これを書いている現在も思い浮かべる事は容易であるし、きつとこれからも忘れない。忘れないが、正直特に気になるようなこともないのが本音だ。

この企画が進行し始めた時、私達の中でとある行動が流行した。それは、登校時松原寛の銅像に向けて一礼をするというものである。その様子を撮った写真をラインのグループへ上げたり、メッセージで知らせたり、大いに盛り上がった。その様子が私は頭から離れない。あまり馴染みのない光景であった、ということもあるのだが、皆樂しげに銅像に一礼して行く様ははつきり言って異様だった。その形容し難い感情が、その行動を私の中で

印象付けているのだと思う。

だが驚くことに、私は今あの銅像に一礼をするようになっていた。異様だと思ってしまうのは一体どうしてなのか気になって、実際に行動してみようと考えたからだ。その行動がいつしか癖になり、今では校舎内に入る際一礼するようになった。今でもその行動理由はわからない。形容し難い感情が湧いてくるし、ほんの少しだけ羞恥心が残るといいうんとも言えない成果だが、ひとつだけわかったことといえば妙に清々しいということだろうか。ではこの清々しさは一体何なんだろう、と考えた時、私は一つの結論に辿り着いた。その結論を説明するためには、私がまだこの学校に来るか不明だった高校の頃まで遡る。随分と長い話になってしまいが、聞いてほしい。

この学校を受験しようと思った時、私は酷く悩んでいた。当時私は元々演劇を主として勉学に励みたいと考えており、その学校探しの過程で見つけたのがこの学校だった。練習風景はとても素晴らしく、参加もさせてもらえて、本当に楽しかったのだ。オープンキャンパス当日までは確実に演劇学科に入ろうと考えていたのをよく覚えていた。

結論から言えば、私が今文芸学科に所属している時点で答えが見えてくるだろう。結局私は演劇学科に行かなかった。受験を文芸学科に変更したのだ。だが私は全く後悔していないし、なんならこの選択で本当に良かったと心の底から思っている。そして入学したが、日本大学芸術学部の文芸学科であったことも。そう、誇りに思っているのだ。この学

校の在校生であれることが。この学校に来て、様々な発見も体験もあった。演劇という枠から外れたお陰で、今後の演劇生活を見直すきっかけにもなった。コロナ禍であったということも事象としては大きいですが、それ以上にこの学校で出会えた仲間たちとの体験は、私という人間を大きく変えてくれたように思う。

つまりこの学校が無ければ、この学校に入学していなければ、文芸学科に所属していなければ見えなかった景色が山のようにあったことになる。私はそれを見る機会を手に入れ、今こうして一人の表現者として勉学に励むことができているのだ。それはとても名誉なことであり、誇りに思うことだと私は思う。そしてその原点を創ってくれたのは、紛れもなくかの松原寛である。だから私は松原寛の銅像に一礼をした時、妙に誇らしくなるのだ。私はこの学校に来たぞと、この学校で育ってやるぞと、胸を張れるような気分になれるのだ。

言ってしまうえばそれは、膨大な自己満足に過ぎない気持ちだ。松原寛自体に感謝を示しているわけではない。結局、企画に参加している他のメンバーの一礼はどう言った理由でされていたのかもわからないし、完全に自身のための行為になっている。

だが、私は松原寛を尊敬している。芸術を学問とし、総合してくれたこと。そのお陰で私はたくさんの視野を持つ友人たちと出会うことができたのは確かなのだ。銅像の前の一礼は決して感謝を示すためのものではないが、私は松原寛を誇りに思っている。彼が総合

芸術を目指してくれたから、今の私がある。だからこそ、私は銅像に一礼するのをやめない。本来であればこの気持ちで創作文に混ぜて書くのがいいのだと思う。しかし、今の私の技量では伝えることが難しかった。途中でどうしてもあらぬ方向へ行き、伝えたいことと全然違うことを書いていた気がした。ならばと、今回ストレートに自分の思いを書くことにした。随分と長い自己語りで申し訳なく思うが、これが私から見た松原寛についての本心である。私はこれからもこの学校に通えることを名誉に思うし、誇りに思うだろう。そしていつか、この企画のリベンジを行いたい。

終

いま、「熱情」と向き合う。

山根  
麻耶

いま、「熱情」編集部のみんなの作品を読んだ。ひとりひとりが松原寛先生や藝術とひたむきになっていることが活字の隅々から伝わってきて、私はん無量である。

この「熱情」編集部ができたのは、本当に些細なことがきっかけであった。冒頭で日菜乃ちゃんが述べていたが、四月の初めに日菜乃ちゃんが「寛先生の雑誌があったら面白いんじゃない？」と冗談で言い、それを私が鵜呑みにして仲間を集め始めたのだ。

今年の四月十四日、九人で構成された「熱情」編集部は「ZIN」上で結成された。大学の授業が始まってからすぐ、それぞれ寛先生の銅像と写真を撮り始めた。

四月末、寛先生のことを学ぶために日藝ライブラリーをもらった。先日、ドストエフスキーの展示の際に聞いたのだが、日藝ライブラリーは清水正先生が図書館長を勤めていた際に始まった雑誌らしい。日藝ライブラリーがなかったら私たちはこれほどまでに寛先生のことを知ることができなかつたので、日藝ライブラリーを創った方々に感謝したい。

最初は本当に面白半分で、百周年だし、学生だけで変な雑誌を創ろうかな、くらいに思っていた。

が、ソコロワ山下先生が授業で寛先生のことを紹介しているのを見て、これはもう先生ともコラボをしたいと思った。声をかけると、先生は快く引き受けてくださった。気が付かぬうちに、自分たちでも驚くほどに「熱情」の名前が広がっていた。

五月五日、初めての会議はもちろん zoom である。(その後も何度かした会議は全てオ

いま、「熱情」と向き合う。

オンライン上であった。) これはまさしく、オンライン元年世代と言われた私たちだからこそできたことだと思う。私たちは入学してから今まで、ほとんど会わずに日藝生との交流の場を広げてきた。感染症が流行する前の時分では到底考えられなかったことなのだが、人間というのは不思議なもので、慣れると大概の作業はオンライン上でできるようになる。原稿の受け渡しも、もちろんパソコンとスマホの中で行われていた。

九月十四日。まさに今日、初めて熱情メンバーが大学に集うことになった。今までもゼミ等で個々では会ってきたのだが、メンバーを熱情のために学校に招集したのは今日が初めてである。編集部発足から既に五ヶ月が経過していて、私もとても驚いている。

二年生になつて、私はあることを目標に掲げた。

それは「やりたいことはぜんぶやる」ということである。とにかく何もかもすべて、やりたいと思ったことは全部やると私は決めたのだ。

去年と同様に大学の授業に全力で取り組むこと、小説を書くこと、戯曲を書くこと、本を読むこと、友人に誘っていただけだった演劇の公演。夏休みまでも色々なことをしてきた。

もうすぐ後期が始まる。後期もやりたいことが山のようにある。もうすでに予定はパンクしている気がするが、誰がなんと言おうとやりたいことは全部やると決めているのだから余すことなく全てやる。無論、この「熱情」を雑誌として発行することも今年の私のや

りたいことのひとつである。

わたしはいま、好きなことをして生きている。これだけ自由に藝術活動に奮闘できているのは、紛れもなく日藝に入ったおかげである。もしも日藝ではない別の場所にいたのなら。もちろん他の場所であつてもやりたいことを見つけて頑張っていたであろう。けれど、これほどまでに色々な藝術活動はできなかったのではないか。

どうして私がこれほどまでに色々なことを頑張りたいと考えているのか。それは紛れもなく周りの日藝生からの影響である。

私の周りの日藝生は、本当にすごい。何がすごいって、それこそこのオンラインの荒波の中、今の自分ができることを模索し、全身全霊を賭けて藝術と向き合っているのだ。

これはおそらく寛先生がこの日藝に求めていた理想の学生であるように思う。周りにいる無我夢中でチャンスをつ掴んでいく同級生や先生方を見、私もいまできることをやってみようと考えたのである。

「今、こういう状況であることが、いつかの自分のためになるよ」

こういう言葉をかけてくる大人と何度か会ったことがある。私たちが異例の大学生活を送っていることに對して、このような励ましの言葉をかけてくれる人は少なくない。

こういう言葉をくれた大人には申し訳ないが、私はそういう言葉たちに、憤りを覚えて

いま、「熱情」と向き合う。

しまった。正直これを初めて聞いた時、悔しくて仕方なかった。

何故か。私たちが学生であるのは、今、この瞬間しかないから。私が大学生を名乗れるのは、あと二年と少しなのだ。大人の貴方は、私たちと同じ学生生活を送ったのですか？と聞き返したくてたまらなくなつた。

この状況で学生であることにありがたさを求めたらいい、という思考を投げかけられることは、一年前からよくある気がする。

実際いま学生である私たちには、たぶん苦痛でしかない。みんなそんなに口に出さないだけで、本音をいえば毎日学校に通つて、パソコン越しではない友や先生の表情を見て、放課後カラオケとかにいつて遊んで、飲み会して、みたいな夢に描いた学生生活をしたいのだ。

でも、そんな弱音を吐いていても何も始まらない。だからこそ、私たちは生き急いでいて、今を必死に追いかけている。コロナがあつてもなくても、きつとそうだったのかもしれないけれど、良くも悪くもこの状況下だったから、私たちはいまを、この学生という権利があるこの瞬間を必死に追いかけているのだ。

何を言いたいのか自分でもわからないが、とにかく、この日藝で過ごせる幸せを手からこぼさないように生きていくことこそが、私の今いちばんしていたいことである。

そんな大口を叩いている私だが、実際のところはまだ大きなことはひとつも成し遂げられていない。それこそ数ヶ月前、考えすぎて何も書くことができなくなつてスランプ状態に陥つたし、今だつてあんまり小説が書けない。そもそも小説を書いて生きていきたいのに、小説を書くことが苦手である。

そんな私でさえも受け止めてくれる、それが日藝である。日藝に入ることそれ自体が、高校時代の私にとっては夢のまた夢だった。

いざ入ると、今まで述べた通りすごい日藝生が山ほどいるのだ。ああ、なんで私はこんなにすごいところにいるのだろう、と思つたことが何度あつたかしかない。同じ藝術を志す同志が集う場だからこそ、悔しさと劣等感に苛まれるのである。

でもそれ以上に、喜びがある。自分と同じように頑張っている人がいる。その人たちと今こうして雑誌を創ることができているのだから間違いない。

改めて、今日、日本大学藝術学部に所属していることの素晴らしさを感じたのである。私なんかの力では、ほんとうにも真面目で不真面目な雑誌だつて出来上がるのである。仲間たちと手を組めば、こんなにも真面目で不真面目な雑誌だつて出来上がるのである。

熱情、というのは何なのか、という問いを、ここ最近あたまのなかに泳がせていた。

いまの私には、その熱情というものの本質が、まだわからない。わからないことはわからないままでもいいのだということを、日藝にきて幾度となく学んだのだからわからない

いま、「熱情」と向き合う。

ままでもいい。が、わかりたいなど思う自分もいる。だから私はこれからも、熱情を持って「熱情とは何か」という問いに全力を捧げなければならぬし、そのためには明日も明日も藝術を続けなければならないと思う。

これから先、人工知能が発達したりして、無駄な仕事が消えていく、とよく言われる。というか既に人間の仕事は消えつつある。藝術というのは、言って仕舞えば無駄なことである。仕事にすらならないのかもしれない。今書いているこの文章だって、たかが活字であり、お金にも食料にもならない。私が生きていく上で、今やっていることはすべて無駄であると言っても過言ではない。

そのことをわかった上でも私は、人間が生きている限り、藝術はなくならないと思う。だって、これまでの百年、何があってもこの日藝は残り続けたのだから。戦争のために名前を変えたことだってあった。それでも今、藝術という名を堂々と掲げ、残り続けているのが日藝である。

日藝が二百周年になる頃、おそらく私は生きていない。私が二百周年を見ることができないのと同じで、二百周年の時に日藝生である学生もまた、今のこのマスク越しのお祭り騒ぎを見ることはできない。

でも、ここに今日のことを書き記すことはできる。今の私が見た百藝を記録しておくことこそ、全力で無駄をする私の使命のひとつなのではないか。

もしも百年後、運よくこの「熱情」創刊号が、誰かの目に触れられたなら。

寛先生の熱情が百年先の私に届いたように、彼らにもまた私たちの熱情が届くのかも  
しれない。

そんなとんでもない夢を頭に思い描きつつ、今日の座談会のため、私は布団に入るのだ  
た。



## ◎ソコロワ山下先生と「熱情」編集部による座談会◎

今回、文芸学科主任のソコロワ山下先生（以下、ソコロワ先生）と松原寛先生について対談しました！

ソコロワ先生「とにかく、松原寛の言葉を読んで欲しいんです。皆様方はもうご存知だと思いますんですけど、大体松原寛の本で必読は、『門シリーズ』っていうのがあって」

山根「哲学の門？」

ソコロワ先生「そうそう！ 哲学の門と、あとなに？」

本間「門と？」

ソコロワ先生「藝術の門」

本間「そうそう藝術の門や」

ソコロワ先生「あと絶対必要なのは宗教の門」

本間「へ〜！」

ソコロワ先生「この三つ、『門シリーズ』は重要なので読んでください、本はないけど（笑）」

山根「そうなんですよ(笑)」

阿部(も)「どうやって読むんですか(笑)」

北川(あ)「ははは(笑)」

※松原寛先生の書籍は、貴重な資料なので、基本的には学校にしかないので。

一同、大笑い。

ソコロワ先生「一番身近なのは、最初に書いた「藝術の門」ですね。これちよつと原本が向こうなんですけど、「藝術の門」は今回復刻しますので」

本間「お」

ソコロワ先生「皆さん方に読みやすいようにふりがなつけて、旧字を新字にしたりして復刻しますので、百周年を機に。それと皆さん方の情熱？」

本間「熱情！」

ソコロワ先生「熱情をセットで学部のでらい先生にね」

山根「やばすぎ」

ソコロワ先生「あれなんですよ。(熱情のために)小説とか書いているんですよ？」

山根「はい」

ソコロワ先生「そんでき、もしよかったら企画考えてください。松原寛が現代にどう影響してどう継承して、どう発展していくのかとかね、面白くない？」

本間「面白いです」

ソコロワ先生「で、あと私たち企画しているのは、松原寛のことばを紹介していくことな  
んですね。最初から哲学がどうか松原先生は何年にどこで何したとかがつて  
いうのももちろん必要なんですけど、松原先生の言葉、あの特にこの三冊（先  
程の門シリーズ）に残されている言葉をぼんぼん紹介したいんですよ。たぶ  
ん、この言葉に熱情を感じるんだよね」

本間「そうですね」

ソコロワ先生「それを展示したり、授業で紹介したいと思っています」

山根「おぉー」

ソコロワ先生「ではここで、クイズです！ あのものかしたら（日藝）ライブラリーに書  
いてあったかわからないけれど、松原先生は、『藝術とは、ペけペけです』と言いました」

一同、大笑い。

山根「めちゃくちゃむずい（笑）でも書いてあったよね！」

本間「あつたあつた」

阿部（ひ）「ぺけぺけ?（笑）」

ソコロワ先生「藝術の「ぺけぺけのぺけぺけ」。藝術の」

阿部（も）「なんだろ、どつかで引つかかつてはいる」

ソコロワ先生「いいんですいいんです」

北川（あ）「いいんですいいんです（笑）」

ソコロワ先生「答えは『苦悶の象徴』」

全員「あ〜!!!!!!」

また、大笑い。

ソコロワ先生「いいねいいね、この反応! 私の解釈ね、それぞれ解釈は自由だよ。松原

先生の「藝術の門」、「哲学の門」、「宗教の門」を読んだ私の解釈は、絶対藝術をやるには哲学と宗教は必要なんですよ。松原先生の根底にあるのは、絶対的にやっぱり宗教。宗教っていうとき、我々にとつてはなんか、「おー」

とか「んー、いよいよ宗教行っちゃったんだ」みたいなアレだけど、西洋学問とか外国の文化に触れる時、やっぱり宗教抜きでは、理解できないですよ

ね。我々日本人にとつては何かなくて考えたときに、自然とか、自然を抜きになんか日本の文化を考えるってできないと思いませんか？ 春夏秋冬とか自然の。それと同じように、宗教抜きでは絶対的にもう無理なので、松原先生は宗教。で、じゃあ宗教ってなんだってことを「宗教の門」で書いてます。私のこの「宗教の門」が一番面白いなと思っただけで」

本間「(本の中で) 一番付箋がついてる」

ソコロワ先生「そうそう。私宗教者ではないんだけど。なんか面白かったすごい」

山根「読みたい」

ソコロワ先生「やっぱり一番刺さったのは、考えることとか疑念を持つことは哲学なんだけど、宗教って結局やっぱ宗教は絶対的な何かかも、絶対的な大きいもの。全てをこう考えることとか、哲学だと「真善美」って分けるけど分けないで、絶対的な局地。それを松原先生は『聖』<sup>せい</sup>っていう文字でいうんですけど、「聖なるもの」そういうものに対する追求がなければ人間は生きていけないし、藝術はありえない、っていう、絶対的なものに対する眼差しっていう。(阿部広夏に) わかりますか？」

阿部(ひ)「困っている」

ソコロワ先生「絶対的なもの、考えとか学問とかじゃなくて、なんかこう、どうしても求

めざるもの見たいなものつてありますか？」

田口「私はありますよー」

ソコロワ先生「そうそう、そういうの。さつき「真善美」つて哲学では分けていうつて言うんだけど、そうじゃなくて。松原先生はなんかね『総合的な』つていうんですよ。我々は『総合芸術』とか使ってるじゃないですか。今我々が使っている

『総合芸術』つて、文芸とか映画とか、みんなでただ一緒にやっていることを『総合芸術』つて言っているんですけど、松原先生の最初の『総合』は『真

善美』とか全ての知識とか全ての価値観を総合したものを総合つて言つてたのに、今は軽いものになりました(笑)」

本間「演劇とか総合芸術」

ソコロワ先生「そうそうそう、演劇とか総合芸術。総合というのが宗教だよつてことを言ってます。でもそこだけで満足していると宗教者になっちゃうから、それを持って、かつ哲学の方法論で、で、哲学の方法論つていうのはまず疑うこと。あと古今東西いろんな哲学者がいて、特に西洋哲学、カントとかヘーゲルにすごく影響受けてるじゃないですか。で、そういう方法論を持って、永遠なるものを希求するんですよ。でもそうすると絶対に苦しいんですよ。絶対答え出てこないし、もう見

つけるの無理じゃないですか。人間だから、神様じゃないから。で、その苦しむ姿そのものが「藝術」だよって言うふうに言ってるのかな、と私は解釈しています。だから『苦悶の象徴』永遠なるものを、哲学的アプローチで、あの一生懸命に求道していく、その苦しき、苦悶して煩悶する、それが藝術だよ、と松原先生は言っている、と私は解釈しました。そういうことですね。だから藝術をするためには苦悶せよ、煩悶せよ、と清水先生はおっしゃっています、どうですか。苦悶、煩悶」

本間「しまくり」

ソコロワ先生「そうそう！ そうなんですよ。それが藝術なんだよ」

本間「じゃあ藝術してるんだようちら」

阿部（も）「想像以上にすんって」

ソコロワ先生「表現したくても、言葉になかなかできないとかありますよね。でもそれでいいんだよ。筆が止まることもあるでしょう」

北川（ま）「学べば学ぶほど、そうですね」

本間「寛先生は受け入れてくれる」

山根「そうそう、勝手に解釈してるからね」

本間「それが藝術の真理な気もしてくる」

北川（ま）「うん、それは最近すごく思う」

ソコロワ先生「あとさ、なんかカリキュラムとか教育とはなんだとかも書いてあつて、とにかくカリキュラムとかじゃないって。とにかく人。でもそうだよ。学校が悪かったらカリキュラムを変えるんじゃないって人を変える、って書いて

あつた」

阿部（も）「うんうん」

ソコロワ先生「そうだよ、やつぱりその先生がいいっていうのあるよね」

本間「（寛先生）なかなかすごいこと言ってるよ」

阿部（も）「そうそう」

ソコロワ先生「だからそれをさ、パネルにして貼り付けてやろうよ（笑）」

一同、大笑い。

本間「松原の乱かな」

ソコロワ先生「松原の乱（笑）」

山根「でも平気じゃない？（笑）」

北川（あ）「平気じゃないって（笑）」

ソコロワ先生「松原先生もちよいちよい恋愛の悩みを書いていて。そういうのもいいんですよね。『街頭の哲学』って言って、ただ考えるだけじゃなくて、こう現実生活で実践しないといけないっていう。それが日藝のオリジナルの言ったこと。それが受け継がれてますよね。ただただそれを研究するだけじゃなくて、現実生活でそれを形しなきゃいけないし、現実を歩いて行かないといけない。いいんですよ、現実色々あるんです。人間は完璧じゃないと。だからこそ希求するし、神様を創ったし、そういうなんか絶対的なものを希求する心をもう絶対、我々は完璧じゃないんです。大人になったって完璧じゃないんですよ。（中略）芸術は、日大の中でも長い歴史があつて、それこそ日大が、昔はさ高尚だった。山田顕義先生とかね。私立が認められてた時、最初から（日大は）大学だったし。だから今も、歴史のうちの one of 歴史だから」

本間「そうですね」

ソコロワ先生「新しい時代を創っていくのはみなさんだよ。みんなオンライン二年目なの？」

山根「はい、オンライン元年の世代です」

ソコロワ先生「本当にこれからの文芸学科だから。みんな文芸？」

みんな「文芸です」

ソコロワ先生「みんな同じゼミ？」

山根「いや、全然」

ソコロワ先生「いいね」

山根「ここ（山根・阿部素・阿部広夏）が元高野ゼミⅠで、ここ（山根・田口・北川まなみ）

がいま上坪ゼミⅡで、他は全然違うんですけど」

阿部（も）「ここ（阿部素・北川綾乃）が今高野ゼミⅡです」

ソコロワ先生「高野先生の影が……！　すごい（笑）」

一同、笑う。

阿部（も）「高野先生二年目ですー」

ソコロワ先生「欠席しないゼミでしょ」

山根「はい」

ソコロワ先生「それ高野先生から十回くらい聞いた（笑）」

本間「（周りを見渡して）あ、じゃあでも三つのゼミがいるんだ」

山根「そっか。今上田ゼミと高野ゼミ、上坪ゼミ（のひとたち）だ」

ソコロワ先生「あ〜！」

本間「上田ゼミの三分の二がいる！」

阿部（ひ）「ほんとだ（笑）」

山根「最初、日菜乃ちゃんが松原寛の雑誌つくろうぜ！」って言って、それが冗談だったのに、私が本当だと信じて、じゃあやるからって人集めちゃって」

本間「本当にやるの!? ってね」

阿部（も）「いきなり高野ゼミのLINEに「創始者の同人誌つくるけどくる人いる？」ってきて」

阿部（ひ）「そうそう、みんなくると思ったらここ（阿部二人）しかいなくて（笑）」

本間「爆笑や」

山根「松原寛知らないからいいや〜って人が何人かいて」

阿部（ひ）「知らないけど、知らないことを学ぶのが好きだから」

本間「お〜、いいね」

ソコロワ先生「ほんと（先生の本を）読むと、全然面白い」

山根「全然（笑）これ（日藝ライブラリー）も面白いもんね」

ソコロワ先生「それすごいよね、皆さん（ちゃんと読んで）ね。（松原先生は）だってこんな学部つくっちゃうんだから面白いんですよ」

田口「変人が多いですね」

山根「そうね」

本間「元祖変人」

ソコロワ先生「そうなんですよ」

阿部（も）「素敵な変人がたくさんね」

ソコロワ先生「そう、そうなんですよ。今こそ変人ルネッサンスですよ本当に」

本間「変人が世の中開拓しないとダメだよ」

ソコロワ先生「そう、うちの学校の存在意義ってそこだったのに」

本間「オンラインのせいであんなに」

山根「絶対隠れ変人いるよね。こんなにやばい人たちがばかりだからバレてない人いるって」

阿部（も）「家から出ないでできる変なことって何って思う」

本間「そう」

ソコロワ先生「あゝ」

本間「ネット使って変なことするしかない」

阿部（ひ）「熱情や」

本間「熱情だな」

一同、笑う。

ソコロワ先生「まずは、(寛先生の文章が)面白いので、ぜひ。結構面白いので。最近女性の(問題)流行っているじゃん。LGBTとか。何気に言っているのね。女性はやっぱり貞淑でなければいけないってその時代だと言われていて。そしたら(寛先生)、男性もだ！ みたいなの。男は貞淑であれ！ みたいなの」

本間「さすが」

ソコロワ先生「なんか男遊び女遊びすんな〜みたいなの」

本間「(小声で)でも自分も……」

ソコロワ先生「そう、そうなの！ そこでもまた煩悶するの、煩悶」

本間「それもまた藝術なんですかね」

ソコロワ先生「そうそう。やっちゃうんだよ、それが人間なの。やっちゃうんですよ」

田口「やっちゃうんだね」

ソコロワ先生「そうなんですよ」

山根「私アレが面白かったです。武蔵美と多摩美が分裂しちゃう事件。武蔵美と多摩美が分裂しちゃうのって、元を辿っていけば松原寛先生のせいですよね」

ソコロワ先生「そっか〜！」

山根「それが面白いなって」

本間「面白いよね」

山根「日藝のせいであそこ別れちゃったんだなって……岩崎先生が書いてて」

ソコロワ先生「岩崎先生すごいよね。買収作戦ね、私大の。昔はワイルドだったんですよ。

それで大失敗して。でもその野望がすごいよね。日藝は日本の藝術だつてこ

とだから。日藝」

本間「私は藝術を理工にしたのが一番面白いと思いました。文科省に何ヶ月も粘つて」

ソコロワ先生「そうそう」

山根「あれ、専門部、板橋工科」

本間「アレこそ熱情じゃないですか」

山根「熱情、ソコロワ先生の授業からとつたんだよね」

本間「そうそう」

山根「なんかソコロワ先生の授業の松原寛先生の話の時に出てきて」

本間「そう、それで私が「熱情」って雑誌の名前にしたいねって」

ソコロワ先生「そっか〜（笑）」

## 編集後記

まずは、この訳のわからぬ本を手にとり取ってくださった読者の皆様、ありがとうございました。頁を開いてもらえたことだけでも幸せなのですが、あわよくば作品を読んでください。寛先生

を知っている方にも、私たちがみたいにも、今まで知らなかったという方にも、楽しんでいただけるものだと思います。私を保証します。間違った文章の書いた作品です。

次に、伊藤さん、伊志嶺さん、上田先生、上坪先生、築城先生、坂下先生、清水先生、高野先生、松原寛先生の資料収集や座談会、編集作業等々お世話になりました。ありがとうございます。それからもうよろしくお願いいたします。

そしてソコロワ山下先生。学生であ

る私たちの突拍子もない企画に協力してください。本当にありがとうございます。先生ののおかげで、この雑誌は想像を絶するところに来ました。感謝してもきれないです。これからも一緒に、全力で変なことをしましょう。

さいご、この企画に参加してくれた松原寛研究会のみんなへ。ほんとうにありがとうございます。みんながいなかったらこの雑誌を創ることはできなかった。ひとりひとりが向き合ってくれたから、いまここに熱情は在る。そのことが、ものすごくうれしい。みんなだいすき。これからもよろしくね。

松原寛先生のことを知るなかで、自分の無知さを改めて感じ、今まで手に取らなかったジャンルの本を読むようになりまし。知らなかった考えに触れることが、いまは愉しくて仕方がありません。わからないことを一から知

り、そこから創作する面白さを学びました。ほんの少しだけ、日藝文芸の

まだまだ知りたいこと、書きたいこと、ただけです。これからも、寛先生や興味のあるもの、じぶんじんと対峙し、苦悶していきたいと思ひます。

山根 麻耶

これを書いていて苦しいと感じた時、寛先生の言葉を少しだけ理解出来たように思いました。こんなに真面目に編集後記を書いているのは私だけのよう気がしています。ありがとうございます。

くりすていのアヤノ

本誌は編集委員ひとりひとりが、内なる「熱情」に向き合ったからこそ完成を迎えることができた。形式は違え

ど、どの作品からもその足跡を感じて頂けることだろう。

そして編集後記までたどり着いて下さった読者の方に向けて、僭越ながらお伝えしたいことがひとつ。「餞」は松原寛が妻に宛てたと仮定して書いた実直な詩だが、「かはたれ時」にはわたしの個人的な秘密を忍ばせてある。むろん『熱情』編集委員にもこの秘密を知る人はいない。顔面どおりに受け取らずに、考察しながら読んで頂けたら幸甚である。

最後に、刊行に当たって協力して下さいましたソコロフ山下聖美先生をはじめとする、教職員の皆様は厚く御礼申し上げます。

田口愛理

正直この企画を聞いた時はどうなることかと思いましたが、なんとか無事

に形になってよかったです。同時に、松原寛のことを知る機会を得られたこと、光栄に思います。誘ってくれた代表者のお二人に感謝を。そして企画するにあたりお手伝いしていただいた方々、メンバーの皆様、最後にこの本をお手に取ってくださった方にも深く感謝を申し上げます。これからも彼が行きたいと思います。とても変人の集団ですし、きつと後二年も最高に面白い年になるでしょう。では！

馬場 楓

創始者も変わってたら日芸生も変わってるのは当然の法則なんだなあ

金子汐音

よく当たるとい性格診断をしてみたら、平和主義者だという結果が出ま

した。友達に結果を伝えると、「性格悪いのに心根は優しいんだね」と言われ、他人から見た私の姿に怯えています。このタイプの人は、いつも温厚で他人の気持ちを尊重する優しい人、という特徴があるそうです。確かに結果を疑うべきだと思いますが、何度やり直そうとも同じ結果になるのです。データは嘘をつきませんね。

北川まなみ

前書きの通り、この雑誌「熱情」は

半ばノリと勢いで完成してしまった。

その全てを読んだ今、皆さんは何を考えているだろうか。「寛先生の要素が薄いぞ！」だとか「寛先生を馬鹿にしているー」などと仰られる方もいらっしゃるかもしれないが、そのような

方々には私からお詫び申し上げたい。しかし、私たちなりに「松原寛」とい

う一人の男について考えながら執筆したことは確かであり、自分の作品においてもその目的を遺憾なく達成したと自負している。きつと仲間たちも同じことだろう。

この企画が大学二年生という社会に巣立つ前段階において計画されたことは喜ばしきことである。今回の編纂を通して、寛先生の様々な名言に触れた。私もその名言に感化された一人である。彼の発言は極めて哲学的でありながら、人間として生きる上での生々しさを孕んでいる。そうした教訓は以降の社会を担う私たちにとって、大きな発見と学びに満ちていた。今後、世間という海を渡りゆくなかで、きつと寛先生のお言葉という權は私たちを辿り着くべき岸まで運んでくれることだろう。

今回、熱情編集部の企画としては、

この雑誌をもって一区切りとなるが、以後も「松原寛研究会」として寛先生を後代に伝える活動や、学科を盛り上げていく活動などを精力的に行っていく予定である。その中で熱情という寛先生から教えられたスピリットを存分に広め、その血筋を途絶えさせることのないようにしていきたい。もし、その活動を支援して下さる方がいらっしゃるのならば、是非名乗りをあげて下されば幸いである。もしかしたら、いつかまた熱情編集部として雑誌を出すことがあるかもしれないが、その時は皆さまも再びお手に取って貰えたら嬉しい。寛先生の「日芸魂」がこれからの百年も脈々と受け継がれていくことを願って……

本間日菜乃

他メンバー

新井謡音

## 熱情

発行日 二〇二一年一月一八日

発行人 山根麻耶・本間日菜乃

編集人・裏表紙デザイン 北川まなみ

表紙デザイン クゼラ

協力 ソコロワ山下聖美

発行所 松原寛研究会「熱情」編集部

印刷所 有限会社 国宗



「热情」编辑部